017596-000-4

特18-204

教海余滴

広幡　慶人／述

M45. 1

ABF-0389

序言

一、口に説く者は、其人の一生五十年を出でず、しかも時を得、處を得、説聽の縁、熟して、初て之を爲すべし。然れども筆に跡を留めおかんには、數百年を經るも、數千里を隔つるも、時間と空間との障りなく未知の讀者よく説者の心を知り、説者また讀者の面を見ずして、道を傳ふることを得。思ふに長く世を利し多く人を益する者、それ著書の右に出るはなかるべし

一、祖師親鸞聖人の六百五十回の御遠忌は、來る明治四十四年にして、近く目睫の間に迫れり、大谷の流

No. 1. 15

を汲む者、誰か聖人の高恩に浴せざる者ぞ、須く身に相應せるものを以て、蒼海の一粟なりとも、酬恩せざるべからず。偉なるかな聖人の德。

一、予は去年十二月七日、二十七歳になれる三番目の弟（知海と云ふ）を失ひ、今年四月十五日、二十四歳になる四番目の弟（多門と云ふ）に別れき、骨肉と離れしより、世の無常は深くも感ぜらるゝものなるに、加へて六月中旬より、予は盲腸炎にかゝりて、一時は如何と思ひしこともありしが、幸に佛祖の冥祐により、今日あることを得たり、去ど之より增すゝ人生の儚なきを覺り、

我身の賴むに足らざるを、知るに至れり。

一、予は是においてか、祖德の萬一を謝せんが爲、また一は亡き兩弟の靈を慰めんがため、予が露の命ある內にと思ひつゝ、曾て教界において、試みたるものゝ中より拔き出でゝ「教海餘滴」と名け、五千部を限り、廣く人々に分つことゝは爲しぬ。

一、予は本書を出版するにあたり、資金その他について、左の諸君の、大なる助力を受たり。予は之を感謝すると同時に、長く其好意を紀念せんため、茲に其芳名を記錄しおくもの也。

明治四十二年十二月中の五日
安藝大竹の里善福寺内槐庵において
著者之を誌す

廣島縣安藝國佐伯郡大竹町（姓名いろは順）

二階堂三郎左衛門　和田道太郎　和田玉次郎
階川榮助　階川勝次郎　鳥田爲人
田中小作　田淵只一郎　田熊孫次郎
田中鶴一郎　田淵映芳　長岡英藏
中川寅吉　中茂稱吉　中川忠次郎
村井關松　故小池寛九郎　小池省吾

小林彌　故小森五郎兵衛　三上覺一郎
塩田富太郎　廣幡知三　故森周七
森松吉　森關一　角井利三郎

廣島縣安藝國佐伯郡木野村

故稲田近義　稲田嘉一郎　今田静江
稲田亨二郎　土手小次郎　小原庄松
和田幸太　加藤逸角　角田庄松
上前甚兵衛　加川半六　加納鶴次
角田惣吉　故高津八十郎　高津國吉
竹本利三郎　津川長一郎　山崎秀吉

松本才助　藤本玉之助　兒玉駒之進
兒玉太市　兒玉孫太郎　兒玉佐一郎
兒玉孫八　故兒玉惠作　阿部仙吉
北海道石狩國上川郡旭川町　小林五兵衛
廣島市荒神町　渡邊島吉
廣島縣佐伯郡石内村　松田紋兵衛
山口縣周防國玖珂郡廳里布村字裝束　濱田哲
村上一男　島田京之助　故島田實五郎
在米國　岩崎知徹　圓福常照

目錄

演說

一、處世と佛教……一丁
一、向上主義と阿彌陀佛……二十八丁
一、社會問題と佛教……四十四丁
一、婦人の三大時期……六十二丁

講話

一、惡人正機に對する吾人の立脚地……七十八丁
一、噫!! 親鸞聖人……百丁

説教
一、二種の深信に就いて……百四十二丁
一、白骨の御文に就いて……百五十八丁
附錄
一、四十八願の歌……百八十一丁
一、宗祖大師嘆德の歌……百九十丁
以上

特18
204

教海餘滴

學師　廣幡慶人口述
門人　井上慶成速記

處世と佛教

（明治三十五年十月十五日於琉球國那覇眞教寺演説）

世の中を渡りくらべて今ぞ知る
阿波の鳴門に浪風はなし

諸君、我々の一生は、謂ゆる「盥から盥に移る五十年」で、生れた時に、盥で産湯を遣はして貰ひ、死んだ時に亦、盥のなかで湯棺を爲

て貰ひます、その盥から盥に移るあひだが、凡そ五十年で、之を人生と云ふのであります、その五十年の人生に對する種々の考を、人生觀と申すので御座います。思ふに、無限の時間上における五十年は實に「ワン、モーメント」で、眞の一瞬間である、が此の一瞬間を、無事に善く通過することが、隨分困難なのでございます。かの海くらく浪あらく、怒濤天をまくと云ふがごとき阿波の鳴門も、人生こいふ荒海を、航海するに較べては、物の數でもありませぬ、しかしながら我々が、人間世界に生れて來なければ則ち止む、苟くも此世に生れいでたる以上は、人として之に對する義務を忘れてはならぬ。今、大聖釋迦牟尼世尊が、世に處する道すなはち世を渡る方法について、いかに我々に敎へ玉いしかを、諸君と共に、味つて見たいのでございます。勿論佛敎の根本目的は、轉迷開悟にあるのであるから、世に處する道などは、何でも好いといはゞ、夫迄であるけれども、苟くも國民の一人としては、夫ではすまぬ。されば淨土眞宗の敎などでは、眞諦門（轉迷開悟）と、俗諦門（處世方法）と、ある所以でございます。

維摩經のなかに、布施、愛語、利行、同事といふ四攝法のことが出ております、元來この四攝法は、菩薩がたの一切衆生を引つけるために、行ふこころの法でございますが、之を我々が世を渡る道、すなはち處世の心得として味つて見ますること、深き〳〵敎訓が籠つておるのでございます。

諸君、世間には無慘な最後を遂たり、人鬼と呼れて爪彈を受たり

毛蟲のごとく嫌はれたり、そのほか種々樣々の人物がおります。是等人々の平生を考へて見まするに、多くは精神修養といふことを缺いでおる、また處世の道に對する注意の、足りない結果だろうと思はれます、無慘な最後をとげた影には、そこに然るべき形を具へておる、人鬼といはるゝまでには、幾度か人の生皮を剝ぐほどの、所業をなしておるのである、毛蟲のごとく嫌はるゝも、人が西といへば東といふ、善といへば惡いといふ、右といへば左といふと云工合で、自ら招く結果である。抑も社會は共同生活であつて、人生は一の寓居のごときもので、長く留るべきところではない。然れば少しは我慢も離るゝが好い、我慾も捨るが好い、もしそれ我慢と我慾とを、少しづゝなりと捨たならば、人生五十年、心から愉快に安樂に、

日暮しが出來るであろうと存じます。今日は少し詳しう四攝法について、御噺して見たいのでございます。

一には布施でございます。布施とは支那の譯語で、天竺にては檀那波羅蜜、こゝに略して檀那といふ、我國の語にしますること、施すといふ意で、今日の詞にすること、慈善ごでも申しませうか、兎に角人に物を施し惠んで遣ることでございます。否々人間ばかりではない、一切の生物に對して施すので、乃ち牛にでも馬にでも犬にでも猫にでも鳥にでも、兎に角、生きとし生ける物を惠んでやることがみな布施でございます。

凡そ布施には、三種の區別がありまして、謂ゆる財施法施心施の三でございます。財施とは、自身の持ておる家屋敷を始め、山林田

畑金錢等、其他あらゆる自己所有の財産を、施してやることであります。しかしこんな事は、捨家棄欲の眞の沙門ならばいざ知らず、今日の通常の人には、到底無理な注文であろうと存じます。元より人生は慾の世界であるから、全く慾をすてたならば、我々は一日も社會に生存することは、出來ないかも知れぬ。顧れば内に養ふべき父母あり妻子あり眷屬あり、外に天災地變水火二難等の測るべからざるあり、夫のみならず、四苦八苦の苦みは、時々刻々に身の内外に迫りつゝあり、財産は是等に備ふる金城鐵壁ならずや。然り、財産は身を護る利器であります。いま私が人を助けよ慈善をなせよと申しますは、全く慾を捨てよと云ふのではありませぬ、我慾を離れよ貪慾を捨てよ、然らば少しづゝなりと、人に施し人を惠み人を助

けることが、出來るであろうと申したのでございます。何も慈善をなす金とて、棚の隅にも轉つてゐる譯ではないから、好加減に見きりをつけて、施すことを爲ねばなりませぬ。然るに世の諺にもあります通り「金持ト灰吹ハ、溜ルホド穢イ」と申しまして、黄盆の隅にある灰吹のなかに、唾や痰や煙草の吹殼などが一杯ありまするを穢くて見られたものではありませぬ。金持の多くが、百圓たまれば千圓に、千圓たまれば一萬圓に、一萬圓たまれば十萬圓にといふ工合で溜れば溜るほど溜たくなる「人生ハ盡レドモ、希望ハ盡キズ」で、只黄金あるを知つて我身あるを忘れ、進むを知つて止るを忘れている。であるから、人に物を施すこころではない、人の生皮を剝ても取る、轉でも只は起きぬ、砂でも握つておきるといふ手合が、中に

はありまするが、之は謂ゆる有財餓鬼で、命よりも黄金を大事にする守銭奴こいふものである、斯る手合が、多く無慘な最後を遂る連中ではあるまいかと存じます。倉庫に千年の壽命を支へる丈の米俵は、山のごとく積んでありましても、銀行に百千萬圓の黄金は入れてありましても、五十年の天然の壽命をさへ保つこと能はず、人鬼と呼ばれ毛蟲のごとく嫌はれては、幸福の人とは申されますまい。元より財産は必用ではありまするけれども、有りあまるほど持つ必用はありますまい、衣食住に差閊へず、一家の人々を養ふに不足せず、子孫の者が路頭に迷はぬ程に爲ておいてやれば、それで十分であろうと存じます。實に財産別して黄金は、身を活す寶であると共に身を殺す毒刃でございます。今上皇后陛下の御歌にも「持人の心に

よりて寶とも、仇ともなるは黄金なりけり」とありまするが、寔に深き味の籠らせられてある御歌で、我々は座右の銘として、尊崇すべきであろうと存じます。もしそれ貪慾我慾の念に驅れて、飽くことを知らなかつたならば、彼の有名なるロックフエラーやカアネギの如く、億萬の財産を積でも、よしまた、世界の富を一身にあつめても、満足することは出來ますまい。然れば慾を節し分を守り少しづゝなりと、自己の財産の許す限りに於て、物を哀れみ人に施すといふことを、爲ねばなりませぬ、之がすなはち布施のなかの財施でございます。次に法施とは、法を施すことで、我々が説教したり、演説したり、御法話したりするのが、即ち法施でございます。若それ之を廣き意味において云はゞ、人各天賦の職務に勉勵して、

社會人道に貢献することを得るならば、みな法施と申して善かろうと存じます。然るに政治家の或者は、黨派あるを知つて社會國家を忘れておる、我利あるを知つて人民あるを忘れておる、黄金の前には眼眩んで、正不正の區別もつかず、鐵窓の下に呻吟するにいたる是等は我身あるをさへ忘れた者で、世を利し人を益することの、法施の出來ないばかりではない、實に社會に害毒を流す「バチルス」でございます。又かの教育社會に見よ、神聖なるべき教師先生でありながら、時に大小の教科書事件を、惹起すは何事ぞや、これ自己の天職たる、道のために働くてふ法施の心を、忘れておるからである思ふに事あらはれて法庭に引れ、監獄に入る者は十中の二三で、隱れたる事實は、まだ〳〵澤山あることであろう、口にばかり云はずに、少しは心に楊震の四知でも味つて、眞實教育に從事し、道のために働いて貰ひたい、これ即ち法施であつて、如此にして快おのづから來らん。又かの刀圭界に見よ、昔は醫は仁なりといつて、只で病苦を救うたものであるそうなが、しかし之は昔の夢、今日も昔のごとく爲よとはいへぬ、堂々たる學校において、多くの學資と長き時間とを費して、文明の教育を受け、しかも高價なる藥品を使用せる醫師に對して、只でとは無理な注文である、世人はかならず、相當なる代價と尊敬とを拂はねばならぬ。然るに中には、餘り感心の出來ぬ御醫者さんもある、患者が病苦に堪へかねて、再三再四御迎ひを出しても、朝寢の夢暖かに、床のなかで寢言なんか云つておる先生もある、斯る先生は自己の天職を忘れておる者ではあるまいか

朝寢晝寢を貪る心を少しく止めて、病者の痛苦を一刻も早く、輕減せしめ全快せしむるならば、これ活きたる法施にして、社會は喜んで、相當なる代價と尊敬とを拂ふのみならず、其人を深く德とするであろう。又わが宗教界を一瞥せよ、布教傳道勉學を念とする者それ幾人ぞ、思ふに學校の卒業はあろう、しかし學術の卒業はないのであるから、一生讀書の修養を忘れてはならぬ。然るに僧侶の或者は、一卷の聖教を眼にあてゝ見ることもなく、一句の法門をいひて門徒を勸化する義もなし、只朝夕は暇をねらいて枕を友として、寢むり伏つておる。また或者は檀家の葬式を己が職業と心得て、陰坊同樣と成り、年忌等に上席して、盃なんどまでも人より先に呑むをもつて、無上の名譽としておる者もある。また或者は、碁將棋雙六茶花等を自己の本職と心得て、法衣や袈裟を着る身の上を忘れておる者もある。また或者は昔の穢多のごとく、人に逢ふごとに、自ら求めて頭を「ペコ〳〵」とさげる、古の出家は王侯をすら拜せずといつたが、今の僧侶の或者は、路傍にある電信柱や「ポスト」をまで、拜するに至る、哀むべきかな。我々といへども、元より辭義禮讓を卑むものではないが、三衣を着する位地を辱めぬやうにして欲いものである、その他數へ來らば多くの種類がございませうが、今は一々列擧するの遑はありませぬ。思ふに人各好むところあれば、碁を圍み茶を煎る等ふかく、咎むるに及ばず、葬式讀經元より不可なし要は唯、主伴本末を顚倒せず、一人にても多く道に引入て、共に宗教の妙味を嘗るにあり。頭をあげて社會を見ますれば實に世は餓鬼

道である、食に飢たる者、財にうゑたる者、黄金にうゑたる者、教育にうゑたる者、心の修養にうゑたる者、比々みな然らざるはなしあに道に志ある者、起て之が慰安の法を講ぜずや。次に心施こは心で施すことにして、財を施すにも、自己所有の財産なく、法を施すにも自分に修めたる、知識なき場合において、有らば施すべきにこいふ念を、心底に起すを云のでございます。古歌にも「門にたち物こふ聲をきくときは、あはれと思へ物やらずとも」こあることく、手に持物がなければやられぬ、ない袖は振れぬが、あれば遣るべきにこいふ、情ある心を起すのが卽ち心施で、大乘佛教においては、實際ものを施したこ同一の價値があるのでございます。然るに世人較もすれば、手にても施さず、口でも施さず、心にても施さずして、加之罵詈亂暴を爲す者あり、言語道斷の痴者こいはずして何ぞや、宜しく恐れ愼むべきことであろうこ存じます。

抑も布施も檀那こいふことには斯のごとき意味がありますので、施すこいふことを、味つて見ますると、なか〳〵面白いことでございます。道をゆけば、車屋が檀那こ呼びます、家に歸れば、下女下男や出入の者が檀那こ申します、いはるゝ者檀那の意味をしらず、いふ者は元より知らないので、共に知らぬで濟んだ世の中でございます。絹の着物を着たり、立派な洋服を着たりなごしてよい風采ばかりしておるのが、檀那ではない。少しは勞に酬ゆる以外に、施すこいふ意味がなければならぬ。然るに、謂ゆる「義理カク恥カク汗チカク」こいふ三角主義の檀那さんの多いには、驚かざるを得ぬ。

人生は百年も千年も留るところではない、少しは世を利し人を益する布施の行に心を注ぎ、名實ともに、恥しからぬ檀那と云はるゝやうに、爲したいものでございます。

二には愛語でございます。愛語とは、人に對して愛らしい優しい語をもつて交はるので、決して怒り腹だつ語を以てしてはならぬとのことでございます。淨土眞宗の根本寶典たる、佛說大無量壽經のなかには、和顏愛語と說いてありますが、之も同じ意味でございます。ニコ〳〵こした顏色で、その使ふ言葉は、優しい愛らしい語を以てせよとのことでございます。この愛語と申しますことは、無論一般の人に必用でございますが、別して御婦人方や商賣人に必用であろうと存じます、女の膨れ面をし、毒を一升も呑だかといふ顏つ

きで、額に角を生し、口に焰を吐いて、トゲ〳〵しい言葉を使ふほど、見惡い聞苦しいものはないのでありますから、容色の善惡は別といたしまして、常に顏はニコ〳〵こし、言葉は優美しう爲したいものであります、恐く此の和顏愛語は、婦人の第二の生命となるものでございませう。商賣屋でも其通りで、何か品物を買度と思うて店頭にゆく、こころが番頭や手代の挨拶の仕やうでは、華客の御客でも、逃げて仕舞やうな者でございます。そこでどこまでも、愛らしい優しい言葉即愛語を使はねばなりませぬ、たとい此人は、素見であると思うても、粗末にしてはならぬ、素見でも見て呉れる丈が御客であるから、猶更叮嚀にせねばならぬと存じます。愛語について面白い話がございます。昔、英國屈指の豪商大金持に、ヲンヂー、

フートこいふ人がございました、或人が氏に向つて、君が陶朱猗頓の富を累ねた所以の秘訣は、如何ご尋ねたごころが、氏答へて曰く「他ナシ、タヾ慇懃ノ二字ニアリ」ご、成程よく考へたものであります、氏が猶ほ開店の初つかた、一人の乞食少女きたつて、一錢の鼻烟を買いたるごころ、氏はこの少女にさへも、腰を低うし愛嬌を振蒔つゝ「令孃！、毎度多謝、情願マタ願ヒマス」ご述べた、實に氏が富豪ご成り大金持ご成つた原因は、一に此の慇懃その愛嬌にあつたのでございます。この噺の主眼になつておるのは慇懃ご愛嬌ごでありまするが、之を言を換へて申しますれば、和顏愛語ご云ふごごでございます。ごころが我國などでは、三錢か五錢か位の物を買いにゆくご、邪魔くさいご云やうな顏色をしたり、返事も碌にせぬ御店もある、物を買いに行きながら、貰ひにでも行つたやうな、取扱ひを受けることがある、何れが賣人やら何れが買人やら、分らぬごがありますが、之では大なる商賣は出來ない。そこで商賣する人は勿論、御婦人方は別して、また一般の人も、この佛陀の說れし愛語こいふごごを、實地に遣つて頂きたいのでございます。しかし夫が、輕薄に流れてはなりませぬ、衷心より流れ出るごごでなければ成功は爲ぬごごゝ存じます。

三には利行でございます。利行ごは、同じ一つの行ひをするのでも、世のため人のためごいふごごを、第一に心がけるのでございます。世のため人のために働いた人はその家富み其子孫榮ゐるものでございます、我身のため我身の爲ごばかり思つて利己主義、我利我

利主義でやる人は、反つて繁昌せぬものでございます。利他を主こすれば、自利は自ら出來ますが、自利を主こすれば利他の出來ないばかりでなく、完全に自利の目的をも、達することは出來ませぬ。かの風呂に入りて湯を弄ぶに、我方へ〳〵こ、掻きよせまするこ、湯は逃げてゆく、然るに之こ反對に、向ふへ〳〵こ押しやれば湯は反つて我身の方へ寄つて參ります。今、活眼を開いて、古今東西の歴史の跡を考へて見まするこ、之に類する事實は、澤山にあるこでございませう。我國において、織田豊臣の早く亡びたる、北條德川の長く榮にたる、まここに好き例でございます。誰も能く申しまするこでですが、かの福田屋清六こ紀國屋文左衛門この話でございます、紀國屋文左衛門は、有名な金持でありましたが、その金の儲けやうは、自分さへ利益をすれば、他人は泣いても損をしても、攫はぬこいふ流義で、江戸市中が丸燒に成りましたこきに今こそ金儲をする時だこ、直に近郷近在へ人を遣はしまして、諸方の材木を一手に買占め、ドシ〳〵高く賣りましたものでありますから、一擧に大儲けをいたしましたが、もこ〳〵他人の難義を奇貨こして、金儲けをしたのでありますから、永く續く譯はなく、自分は氣狂になつて死し、その家は二代で亡びて仕舞ました。之に反して福田屋清六は、土佐から材木を積みこんで、大阪に賣捌くのを商賣こしておりました、然るに或年、船に多くの材木を積んで、大阪へもつて參りますこ、その前夜に大阪は大火でございましたから、仲買の者なごが清六に、丁度よいこころへ持つて來られた、ウント高く賣れよこ

勸めました、こころ清六は、いや〳〵決してそんなことは出來ませぬ、私は永年大阪を華客として、商賣をいたしておるのでありますから、今御華客の御難義を奇貨として、不當な儲けを仕やうなどは思ひも寄りませぬ、私は矢張普通の價で差上ますというて、不當の利を取らなかつたものでありますから、誰も彼も、福田屋は正直であると云ひだして、思ひもよらぬ大利益を得、家こみ子孫繁昌したと云ことでございます。これ實に自利を主とするものは亡び、利他を先とするものは、おのづから自利を得るといふ好適例でございます。淨土眞宗の御念佛でも、我身のためとか、病氣平癒を祈るためとか云つて、唱へまするとこころが朝家の御爲、國民の爲と思うて唱へる念佛や、御恩報謝の念佛や、世のなか安穩

なれかし佛法弘れかしと思ふて、唱へる念佛は藥になります、之が同じ一つの事をするのでも、世のため人のためといふ利行の心得でございます。諸君、いづれの里に參りましても、泣く兒を寢かす子守唄といふものがございますが、或地方に於ては「ホータル來イ〳〵〳〵、ソッチヤノ水ハ泥水、コッチヤノ水ハ砂糖水、螢來イ〳〵」こやる、また或地方に於ては「……坊ヤガ守ハドコヘイタ、山ヲ越ヘテ里ヘイタ、里ノ土產ハ何モロタ、デン〴〵太鼓ニ鉦ノ笛……」こやる、其他種々ございますが、私が今日までに集めたところでは「チン〳〵チン〳〵チン〳〵ヨ、一歲二歲ハ寢テ育ツ、坊ヤガ寢ンチノ其暇ニ、糸トリ機オリ染メアゲテ三歲ノ祝ヒニ三ツ身キセ五歲ノ祝ヒニ四ツ身キセ、七歲本身ニタツカラハ、ツクセ世ノタメ人ノ

タメ」といふ唄が、一番よいやうでございます、之を彼の「螢來イ」や「デン〳〵太鼓」の唄に較べて見ますれば、子供の心に與へまする印象の差、いくばくでございませう、能く下世話にも、三歳兒の智慧は八十まで、雀百まで踊を忘れぬと申しまするが、幼少の時ごいふものは、見るもの聞くものについて、殊に記臆が盛でありますから世のため人のために働くといふ、利行の觀念を注入したいものであると共に、自身まづ之を我身に行つて見せたいものでございます

四には同事でございます。同事とは能く其人の身の上を思ひやつて、自分も其人になつた積りで、親切にしてやることを云のでございます、同事卽同情とは、思ひやりのことであるから、唯人にも必用である。東北は飢饉であると聞いては、氣の毒である可愛想である

と、同情の涙を垂れてやり、人が丸燒した、洪水に逢うて皆流して困つておると云ことを聞ては、不憫な者であると惻隱の心を起す、之が卽ち同事といふものでございます。この同事同情が姿形に現れると、最初にいつた布施卽慈善となるのでございます、そこで同事といふことは、未だ心の上の働きをいふのであります。古人の句に「朝寒やあれも人の子樽拾ひ」といつておりますが、十七文字でも、よく人情を盡したものでございます、冬の寒さの嚴しい朝に、雪や氷に冱へながら、酒の空樽を集めに歩いておる子供を見ては、あゝ可愛想である、宅の子供はまだ炬燵のなかで夢を見ておるのに他人に使はれておることはいひながら、可愛想である、不憫なものであるこういふ心を起すのが、同事である卽ち同情でございます、昔は

村上義清、武田信玄ご兵を擁へたるとき、信州は山國であるから、塩のないのを付込んで、之を送る道を斷つた、食塩は日用品で一日も缺ぐべからざるもの、その苦痛や察すべしである、時に越後の上杉謙信これを聞いて、村上の卑怯を惡み、罪もなき人民の苦みを氣の毒に思ひ、ふかき同情の念より、ドシ〳〵ご信州さして塩を送つてやつた、今に至るまで人傳へて美談となすことでございます。この氣の毒である不憫であるこいふ心を押擴げて、あらゆる方面に同情の涙を注ぎますので、下女下男に對し、店の者に對し、一般の人に對し、禽獸に對してまでも、この心を忘れてはなりませぬ、即ち同事同情の心をもつて、物に接せよこの、佛陀の御教でございます。

諸君、以上は處世の要道すなはち世渡りの方法について、四攝法の梗概を述べたのでございます、人生五十年、これらの心掛が常にあつたならば、大した怪我はなかろうご存じます。乃ち布施こいつて人に物を施すこと、愛語こいつて他人に對して愛らしい優しい言葉を使ふこと、利行こいつて物事をなすに世のため人のためご思つて爲すこと、同事こいつて人に對して思ひやりの心をもつこと、この四つは四つながら、我々の守らねばならぬことでございます、我々佛けの子は、この佛けの教へを守らねばなりませぬ。諸君は之を聞きずてにせず、成程ご思ひあたらるゝ處もあらば、今日より之を實行せられんことを希望いたします。終に臨み、長き演說にも拘はらず、御靜聽下さいましたることを、諸君に向つて、ふかく感謝する次第でございます。先。

向上主義と阿彌陀佛（明治三十六年三月二十八日於大隅國種子島説教場演説）

諸君今日は、向上主義と阿彌陀佛てふ演題を掲げて、暫く御靜聽を冒す考でございます。思ふに斯の社會における物凡ては、上に向つて進歩し發展するといふ心をもたぬ者はありませぬ、私は今その進歩發展の究局の目的、向上の頂點は、阿彌陀佛であるといふことを、論じて見たいと思ふのでございます。

諸君すべての動物は、みな向上主義を、その本能として具へておるやうであります。何となれば、之を具へておるものは、世に適者生存することを得、然らざるものは、廢滅に歸する恐あるからでございます。

彼の「雪山ノ兎ハ白ク、菜ノ花ノ蝶ハ黄ナリ」とは、この邊の消息をもらしたもので、常に雪ある山の兎は白く、菜の花の蝴蝶は黄色にして、桑の葉にすむ蟲は青色を呈しておる、動物學者は之を保護色といつてゐますが、思ふに彼等歷代において、異色のものは、強者に捕へられて絶滅し、外界と同化し若くは、外界に適應した者のみが殘つた結果、今日の狀態となつたのでありませう、これすなはち適者生存で、彼等は彼等の祖先より、斯のごとくにして進歩し向上し、身を全うすることを得たのであります。而して此の適者生存の道理には、吾人も亦、服從しなければならぬのでございます。

凡てのもの、この思想を脱することは出來ませぬ、人においても家においても、市町村においても、國においても、亦また然りで、

向上進歩の思想あるものは繁榮し、然らざるものは衰亡す。近くは彼の支那朝鮮のごとき、今まさに衰亡の道程にあるもの、吾人に善き教訓を示す者ではあるまいか、思ふに我國のごとき、ペルリ一度來訪してより、三百年の惰眠一時に覺めて、人は進みに進み、今や世界一等國の伍班に列するやうになつたが、これ卽ち向上思想の發現と申さねばなりませぬ。

世のなかは喰うてハコして寢て起きて

さてその後は死ぬるばかりぞ

之も一種の人生觀には、相違ございますまいが、しかし之では、あまり禽獸と選ぶところはありませぬ。申すまでもなく、動物のなかにおいて、最も進歩し發達し向上したる者が、吾人々類である以上、すこしは禽獸より、より以上の者たらねばなりませぬ。苟くも人にして、向上進歩の思想ある者は榮る、之に反して向下退嬰の者は亡ぶ、活例は近く諸君の四隣にあるなるべし、世には父祖の遺産に縋つて、生活する人物も少なくありませぬが、その多くは手を懷にして暮しておる、たゞ父祖の遺産を減すまいといふ考のみで、增すといふ餘考はないらしい、いやあるかも知れぬが、その活動の出來ない手合が澤山にあります。しかし斯る人物にかぎつて、事大主義で自ら大名のごとく思つておる、人を眼下に見下し、我より外には人なしの勢いで、横座の理窟ばかりを云つておる、大厦高樓に居し、美しき衣服をつけ、家族と共に甘き肉を食する、までは可いがいまだ曾て、世のため人のために働きたることなく、少しも社會に

貢献しない點から見れば、世にあつて益なく、なくて損なき人物で五十年の人生を醉生夢死するもの、何ぞ憐むべきではありますまいか、嗚呼汝の財産を增加せしめよ、而して汝の財産を社會有用の方面に使用せよ、然らば我も人も自他ともに、進歩し活動し向上するであろう。

私共が、常に人に接して感じますることは、今日〳〵主義といつて、世の中を食うてハコして寢ておきて、何のなすこともなく、其日〳〵を暮しておる人には、活氣の見るべきものがない、こころが內に向上の精神が充滿ておる人は、常に生き〳〵しておると云ふことであります。

然らば、その向上主義は、何を目的とし何を對象となすべきや、換

言すれば、その目指すところのものは、何でございませうか。

衣食住なるべきか、曰く然らず。衣服の美、住居の麗、山海の珍味、田野の野菜は、吾人の自然に求むる人情ではありまするが、餘りに趣味が上等とは申されませぬ。

然らば黃金なるべきか、非らず。成程衣服でも食物でも家宅でも其他大抵のものは、黃金で求められます、然れども、その黃金を對象とし理想として進む者は、未だともに向上の大道を語ることは出來ませぬ。西洋に面白い昔話があります、アッシリヤと云處の、ミダスと云王樣は、金錢さへあれば何でも出來る、黃金には萬能力ありと信じておられたが、或時神樣に祈禱をこらして、何卒私の五官に觸るゝところのものは、悉く黃金になるやうに爲して下さいと、

一心に祈られたところが、神樣はそれを御許容あつて、ミダスの願ふ通りになされた、サア大變だ、ミダスの見るもの聞くものみな黃金ならざるはなしで、山も川も庭も池も魚類も樹木も皆黃金と成り、また家も座敷も食卓も食器も食物も吸物も、悉くみな黃金となつた諸君こんな中に十分間でもゐたら、嘸苦しいことでありませう、今ミダスは、その五官に觸るゝところのもの皆黃金で、この金色燦爛たるなかにあつて、遂に飢餓に迫つたといふことでございます、之を以ても黃金は、向上の理想對象となすに足らず、或程度まで必用のものであるといふことが、御領解になつたでございませう。我國などでは能く聞くことでありますが、婦人が辨天さんや鎭守の森にどうか、神さま佛さま、金千兩丈儲るやうに、御授けなさつて下さりませと祈つておる、何故百萬圓も千萬圓も禱らぬかと聞くと餘り多く金があると、主人が他に女などを拵へて困るからと、いつたと云ことであります。これらは此の邊の消息を、赤裸々に、明したものではありますまいか。

然らば爵位なるべきか、曰く然らず、昔は我國の農商務大臣某氏平素非常に功勞ありしが、病氣危篤の時におよんで、男爵を授けやうと云はれたとき、重き枕の下から、今まさに死せんとしておる、この期に臨んで、男爵も子爵も何も入らぬ、といつて目瞑したと云ことでありますが、なるほど死ぬる身には、爵も位も何も入りませぬ。

然らば衣食住も黃金も爵位も、或程度までのもので、我身のある

間丈にして、最後の目的こならぬこすれば、何が絶對最後の目的でございませう、私は斷言します、生命こ知識であるこ、すなはち量りなき生命こ量りなき智慧＝光明を、得るこでございます。

今我々が崇拜しておる阿彌陀如來こは、如何なる者かこいへば、阿彌陀經には、光明無量の故に阿彌陀こ名けこあります、光明は智慧の相であれば、生命こ智慧こを、絶對こびきりに具へてゐらせらるゝが、阿彌陀佛でございます、私の向上主義こいふのは、この阿彌陀佛を理想こし目的對象こして、一致せようこ進み行くのを申すのでございます。

諸君思へ、吾人才あるも學あるも、金あるも藝あるも、この人々が已に一家をなして、その名を天下に知られたこきは、もはや人生に別れを告げつゝある時ではありませぬか。然り人一代にして、家を建て屋敷を求め、田畑を買ひ山林を購ひ、嫁を迎へ娘を遣り、やれ一安心こ思うたこきは、今や地下に隱居せねばならぬ時こ、なつておるではございませぬか。實に五十年の人の生命、有限の壽命ぼこ、儚ないものはありませぬ。

近頃、伯爵大隈重信先生の、長壽法なるものが世に紹介されました、それは動物で、凡て其成熟期の五倍は、生存するこが出來る人間の成熟期は二十五歳ゆゑ、その五倍すなはち百二十五までは、衞生に注意すれば、生存するこが出來るこの說であります。しかしたこへ百年千年生きたこころが、限りある生命であつて見れば、所望不同こいふほこのことにして、賴み少ないこ云ふ點からいへば

同じことであります、故に我々は、量りなき無限の生命を對象として進まねばなりませぬ。

教育の目的は知識を得るにあり、その方法については、開發的と注入的とがありまするが、前者は、知識の名玉が或障害物に包まれておる、その障害物を徐々に取除いて、名玉の光を放たしむるに至るを云ひ。後者は、外界より知識の名玉を、ツギコムを云ふ。思ふに佛教開悟の方法についても、おのづから此の二途あるべし、すなはち通佛法における轉迷開悟の方法は開發的で、眞如法性の寶珠を煩惱惑障が包みかくしておる、その包藏せる障害物を、少しづゝ減滅して、中より珠を取出すのであります。他力門淨土眞宗の教は、注入的とでもいふべきか、その煩惱惑障は、外來の光明によつて轉惡成善するので、すなはち煩惱の氷は菩提の水と、早くも轉化するのでございます。

思ふに世のなかは、野蠻未開より半開に、半開より文明にと、日進月歩進みゆくことは事實であります。私がこゝに立つて演說しておる間も、社會は少しも休息せず、時々刻々に進歩しつゝあるのでございます。しかし幾千萬年經つても、もう之で好いといふことはありませぬ、何となれば「どこ迄も進み行く」といふことは、「どうしても達することは出來ない」といふ意味なればなりであります。言を換へて申しますれば、吾人の知識は遂に有限であるといふのでございます。

英國の大哲學者、ハーバート、スペンサー先生（紀元後一八二〇生一九〇三死）を、

或時訪問した人があります、曰く先生は今日世界一番の學者なれば宇宙のここ何ひとつ知らぬといふことなく、悉く御承知でせうと申せしに、先生完爾として笑はれ、マア〳〵予について來れと、倫敦の市を流れておるテームス河に連れて行かれ、片手に砂を一杯握り示して云はるゝやう、予が知れるところは、この手に握つておる砂の數ほどしかない、そして知らぬところのものは、この河の砂の數ほど澤山である、と申されたことでありまするが、なんと恐しいものではありませぬか。吾人は五十部か百部かの書物を讀めば、それで一簾の學者のごとく思ひ、一人豪がつておりまするが、寔に恥べき次第と申さねばなりませぬ。スペンサー先生の綜合哲學は、三十餘年を費して成就したるもの、身は八十四歳まで存命して、しかも終生學術の研究に一身を委ね、カントにもヘーゲルにも、ショウペンハウエルにも、その他誰にも一歩も讓らぬ程の學者にして、猶かつ然りでありまするが、いま世界十五億の人々を、スペンサーの如く悉くならしむることは、到底不可能のことでございませうが、假に爲し得たとしたところが、宇宙の廣大にして我身の微細なるを見ては、何人も滄海の一粟も啻ならずと感じ、事物の多くして知識の足らざるを見ては、呆然として自失せざるを得ぬことゝ存じますされば如何しても不完全の吾人では、無限の事物を知りつくすことは到底出來ませぬ、故に吾人は、無限の智慧無量の光明を、佛陀より得ねばなりませぬ。

阿彌陀佛の光明は無量なり、阿彌陀佛の壽命は無量なり、無量の

光明をもつては、横に十方世界の人々を攝化し、無量の壽命をもつては、竪に三世の群生を濟度し賜ふ、光壽の二無量をもつて、横竪の兩方面にわたり、一人として漏るゝ者なきは、實に阿彌陀佛の大慈悲にあらずや。諸君去つて淨土の大無量壽經を繙け、その四十八の本願のなか、十二十三は光明無量壽命無量の本願ならずや、これ阿彌陀佛御自身の正覺のみならず、吾人現在獲信の一念において、その約束を成立せしめ、未來は佛の膝下において、おなじ光壽の二無量を得せしめんこの保證でございます。故に吾人は現在に於て、無限の智慧こ無限の生命こを得べき約束をすまし、來世に於て之を實現するのであります、併し吾人は其實現に、一歩〳〵進み近きつゝあることを、忘れてはならないのでございます。

諸君、吾人の境界におきましても、長壽の人で智慧ある者は、ごことなく福々しい德あるものでございますが、有限の生命や知識でさへ其通りでありまするが、吾人もし無限の生命こ無限の知識、即ち量りなき壽命こ量りなき光明こを得たならば、如何でございませうか、私は常に是の福德圓滿せる光壽二無量こ一致せんことを、希望し、諸君こ共に手を携へて茲に到達せしめ賜はんことを、阿彌陀佛に向つて、御願ひ申す次第であります。これ向上主義こ阿彌陀佛を、草したる所以でございます。先

社會問題と佛教

（明治三十六年九月二十一日於鹿兒島市大谷派別院大擧布教隊演說）

今日は社會問題と佛教とふ題下において、少しく所見を述べて見やうと存じます。思ふに社會の出來事たるや、旦に夕に、時々刻々ふり湧いて、四六時中すこしも靜止してはならぬ、これ社會は一の活物なればなりである。資本家と勞働者、地主と小作人、檀那と奴婢、富豪と貧人等、是等兩者間における不平、不和、虐待、抵抗、煩悶、痛苦等を研究して、彼等に慰安を與へ、社會の平和を保たしめ、世の福利を增進せしむるのが、本問題の主眼であります。予は未だ乳臭、白髮の少年にして、斯る大問題を論議するは、聊か大膽の嫌ありと雖、予も亦社會の一員なり、身は是れ宗教家にして、而

も佛教徒なり、然れば佛教上より、社會問題に向つて指を染めんとする、豈に當然の任務にあらずや。

箱根山駕籠に乘る人、駕籠かつぐ人

そのまた草鞋を作る人

諸君、吾人の境界程、貧富貴賤上下區別のある者は、恐くは有りますまい。箱根八里も御駕籠の中で、夢を見る〳〵越す人もあれば重荷を負うて汗油で、人のために働く駕籠舁もをる、夫かと思へばその駕籠屋の足にはける草鞋を作つて、其日〳〵の烟を立てゝをる者もある、何と世のなかは、樣々では有りませぬか。

世は日進月歩と進んで、日本の文明も、世界の强國と足並を揃へるやうになつた。御駕籠は人力車と成り、馬車と成り瀛車と成り、

自轉車自働車と成つた。飛脚は郵便となり、電信電話となり、無線電信電話ごまで成つた。海には五十萬噸の商船は、常に烟を絶たずして、海の内團の健兒あり。百五十萬噸の軍艦あり。陸には十九師外に浮ぶ。其他會社學校の廣大にして、其數の多きこと。昔は暗き闇の夜も、今は電燈の光り晝を詐くに至れり。嗚呼文明の餘澤も亦大なるかな。されど斯の文明の利器を受用し、その恩澤に浴する者は、多くは世の貴顯紳士富豪の徒にして、貧賤の人は之に預ることを能はざるのみならず、反つて之がために、自己の職業を失ふ者あるに至る、彼等の多くが、世の文明を呪詛するに至れる、また無理ならぬ次第といふべし、彼等の多くは、朝に星を頂いて出で、夕に月を蹈んで歸り、多く働き長く身體を苦めて、その得るところ幾何ぞ

美衣なく美食なく、内に父母は食の乏しきを訴へ、妻子は霜夜に寒きを喞つにあらずや、彼等が時に、富豪一夕の豪遊を羨むもの、吾人一片の同情なくんばあらず。見よや貴顯の或者は、右手に權力を握り、左手に相場の樞機を扼し、佳肴美酒は心の儘なり、美人は常に左右に侍し、出るに肥馬あり自働車あり、人生の快樂何者か之に加へん、而して富豪紳士の徒、また之と伍班を列す。吁世は如此にして、富者は增す〳〵富み、貧者は增す〳〵貧に、其行末や果して如何。心ある政治家教育家宗教家の、深く思ひを茲に致し、研究せねばならぬ問題ではあるまいか、吾人は徒に、警鐘を亂打する者ではありませぬ。

吾人は眼を轉じて、本問題の經過に一瞥を與へねばならぬ、元よ

り洋の東西を問はず、時の古今を論ぜずして、貧富貴賤等の差別は人生に免れざるところなれば、釋尊も孔子も耶蘇も、その他古今東西の哲人達、この事を多く口にして居られまするが、其元社會の不平均に源泉を發し、經濟上の問題より起つたのである、夫が段々研究せられて、遂には二個の方面に分れて、之が救濟の方法を講ぜらるゝ樣に成つたのであります。乃ち一は基督教的社會主義で、人間社會は平等である、之に貧富貴賤の區別を設けるのは、間違つてゐる、故に財産は平等無差別に、人民に分たねばならぬ、といふ議論を、初て唱道した人は、佛蘭西に生れたバブーフと云ふ學者であります、彼は神の博愛平等の心より出發して、社會の貧富の階級を打破しやうと、怒力したのである。其後サンシモンと云ふ學者が、また同國に現はれて、新基督教といふ書物を出版し、是非宗教の力に依らねば、社會の平等を計ることは出來ぬと云つて、盛んに社會運動を試みた。また英國などにもチャールス、キングスレーなど云ふ人が出て、下等人民の困難や罪惡は、社會の不公平より起ることして神の博愛の觀念を標榜して、之を救濟しやうと致した。是等の結果として、歐州諸國には、貧民救助を目的とせる病院や學校や孤兒院等の如き、慈善事業が澤山に起つて參りました、近年救世軍といへる社會事業も、起つて參りましたが、之も基督教的社會主義實行の別働隊であります。先年我國の遊廓にも、自由廢業の風が吹荒んだことがあるが、火の手は何時いづれの方面に、上るか知れたものではない、要するに、彼等の理想とし主義とする處は、博愛平等の神

意に頼つて、社會の階級を打つて一丸とし、平等平和の理想鄕を實現せんために、勇戰しつゝあるものであります。また他の一は直接政治上の問題で社會政策ご成り、多くの黨員を有し、中には秘密結社で、吾人に知られぬ者もあるが、主なる者を擧げて見ますれば、獨逸や英吉利に起つた社會黨の如き、露西亞の虛無黨の如き、佛蘭西の財産平均等の如き、西班牙や伊太利に根據を有する、無政府黨の如き者であります。時には亂暴な黨員も居つて、金滿家の邸宅を破壞して、金庫の金を分配したり、帝王を弑し大統領を打殺すご云ふやうな、恐るべき事件も發生した、しかし中には誠實熱心なる、學者も紳士も居るであろう。その主義ごするごころは何れも社會の不平等、貧富區別の打破にあつて、今に至るも惡戰苦鬪を續けつゝあるのであります。去ご何れに致せ、未だ十分なる解決は得られて居ないので、世界における大問題ご云はねばなりませぬ。我國にも先年社會主義を標榜した新聞もあつた、また國家社會黨の如き者も生れたが、政府の嚴命によつて、解散したごか聞いておる、しかし有形の黨員は解散さすごこも出來るが、心の社會主義は如何ごもすることは出來まい、今や學校のストライキ、勞働者の同盟罷工、電車の燒打、農民の縣廳押寄せ等、頻々ごして社會問題は、吾人の眼前に提供さるゝではないか、朝野の政治家ごいはず、教育家宗教家たる者、名利の念を離れて、眞摯なる研究を要する秋ではありますまいか。

上見れば及ばぬごこの多かりき

笠きてくらせ人の世のなか

吾人は先づ第一番に、自己の境遇に安んずると云ふことを忘れてはならぬ、なるほど人間ごいふ惣報業引業の上では、國王も大臣も宰相も、吾人も非人も乞食も、美人も醜婦も、善人も惡人も皆同じことである、去ご別報業たる滿業の上について云へば、一人として相等しき者はないのである、予の知れるところに、四人の子供を持てる人があつた、兄は學者で大膽で、立派な人物であつたが、弟は愚物で才氣に乏しく、而も小心者であつた、姉は美人で、技藝も優れて居たが、妹は醜婦で、無藝の上に、嫉妬心に富んで居つた、是等子供の兩親の心には、兄弟姉妹四人ごもに、美人なれ才子なれ、善良なれここそ祈りもすれ、迚も兄ご姉には幸福なれ、弟ご妹には

不仕合なれご思ひはすまいが、共に同じ人間でありながら、別報業たる夫れ自身の受前の點については、親の力でも致方はないのである。夫ばかりではない、吾人は動物學上、左右相稱の動物ごは聞いてはおるが、兩手兩足兩耳兩眼等、もし嚴密に之を比較したならば相等しき物は一つもないことのことである。然れば各人互に貧富貴賤等の境遇果報の異なるは、寧ろ當然ご云ふべきではあるまいか。大聖釋尊のたまはく「過去ノ因ヲ知ラント欲セバ現在ノ果ヲ見ヨ、未來ノ果ヲ知ラント欲セバ現在ノ因ヲ見ヨ」ご。世の富豪も貧人も、然り等しく人間なり、然れごも其別報業たる各自の果報に至つては兄弟姉妹すら區別あることを忘るべからず、況んや數多き人間に於ておやである、吾人は戰々競々ごして、三世を通貫せる善惡因果の

妙理を恐れねばなりませぬ。

去ご吾人は、世の富豪に對して、卿等は金力あり、社會に跋扈跳梁すべしと、勸むる者でもなく。また貧人に對して、君等は無力なり、宜しく富豪の前に平伏畏縮すべしと、論ずる者でもない、飽迄現在における兩者の衝突を防ぎ、調和を試み、以て社會の安寧と幸福とを、增進せんと欲する者であります、これ吾人の天職にして又佛陀の御心にあらずや、予は是に於てか、佛敎の見地に立つて、二個の解釋を試んと欲する者である、曰く實際的方面、曰く理論的方面是なり、實際的方面とは、資本家にせよ地主にせよ、檀那にせよ富豪にせよ、その何れを問はず、上たる者が下に對して、慈悲慈善の心を以て之に接し、常に慰安を與へ、愛撫以て物を施さんことを

勸むる者である。人或は云はん、資本家などの事業を爲し、勞働者を使役する、唯利益を得ん爲のみ、慈悲の心を起し物を施す程ならば、利益は得て望むべからず、然らば初めより、事業を爲さゞるに優るにあらずや、と。然り豈に夫れ然らんやである、吾人が茲に慈悲の心を起せ、物を施せと云ふは、彼等資本家が得んと欲する利益を全く捨てよと云ふにはあらず、その利益の幾分を割いて、物を施せ、その部下を愛撫せよ、と云ふにあるのみ、言を換へて云へば、利益を一人に壟斷することなく、衆と共に之を分てと云ふにあるのみ。斯る慈悲慈善の心を以てせば、部下のために慈善病院も、學校も倶樂部も、遺族扶助も、得て望むことを得べしと信ず、果して然らば、流石に八ヶ間しき資本家對勞働者てふ難問題も、容易に解決

することを得んか。思ふに地主對小作人、檀那と奴婢、富豪對貧人との關係も亦、之と大差なかるべし。予は今、古來佛教徒の手になれる是等慈善事業の、二三の例を擧げて見む。

むかし聖德太子は、難波天王寺において、貧民救助のために四院を建立せられた、即ち療病院、施藥院、敬田院、悲田院これなり。また光明皇后は、悲田院や施藥院を建てゝ、飢ゑたる人や病める者を救はせられた上に、温室を作つて、諸人に風呂の施行を爲し玉うた。その他德川時代に於ても、黄檗の鐵眼和尚の如きは、一切經を彫刻したいと思うて、千辛萬苦して蓄めた金を不時の、災難に苦しむ人々のために、二度まで惜し氣もなく、施されたと云ふことである。近くは今日、孤兒院とか免囚保護場とか、無料宿泊所とか云ふやうな事業は、皆これ慈悲を土臺とし、涙の手によつて、營まれつつあるのであります。世の富豪も、今や少しく慈眼ひらけて、慈善病院を起したり、大學や商業學校を建てたり、倶樂部などを設くる樣に成つて來ましたが、這は是れ社會のため、一大慶事と申さねばなりませぬ。

次に理論的方面より解釋を下さんに、我が佛陀の敎へたまふ平等差別の敎理こそ、本問題を解釋すべき唯一の利刀なれ。何となれば平等の見地よりすれば、上たる者が下に對して、彼も人の子なり、侮るべからずとの考を起し、差別の心を以てすれば、下たる者が上に對して、彼は我等の君父なり、敬せざるべからずとの、思ひを起すに至るべければなり。これ平等に卽して差別を忘れず、差別に卽

して平等を忘れざる絶對の妙理なり。もし夫れ平等の一面のみを見んか、君臣なく父子なく、大臣宰相なし、何ぞ資本家と富豪あらん斯くして世は無秩序に、危險この上なかるべし。もし夫れ差別の一面のみを見んか、臣妾の徒は永久に、奴隷の境遇を脱することを得ざるべし、斯くして道は怨恨の聲に塞ぎ、世は闇黑たるを免れざるべし。彼の儒教の如きは、實に差別の一面を敎ゆるもの、五倫五常の敎は、目出度には違ひないが、上たる者は喜びも仕やうが、下に立つ者は迷惑を感ずるであろう。彼の基督敎の如きは、實に平等の一面のみを敎ゆるもの、自由博愛の敎は、結搆には相違ないが、大臣も宰相も紳士も富豪も、その階級を奪はれたならば、獨り喜ぶ者は、臣妾の徒のみならん。噫兩者の敎をして、その行くところまで

行かしめよ、その結果や寒心すべきのみ、獨り我が佛敎は、平等差別の兩面を敎ゆる故、この難關を容易に通過することを得べし、乃ち臣妾奴隷の徒も、勤儉力行怠らずんば、紳士富豪とも成り得べし資本家地主とも又成り得べし、これ差別より平等を見るものにして下たる者貧賤なる人の卑屈心を拂ひ、以て興奮劑を與ふるものならずや。若し夫れ、資本家も地主も紳士も富豪も、惡差別の見に墮して自ら高しとし、人を見ること塵埃奴隷の如くせんか、天罰恐るべし、昨の資本家も今日は勞働者に、地主も小作人と、成るなきを保せんや、紳士も富豪も、臣妾奴隷たるを知るべからず、これ平等より差別を見るものにして、上たる者富貴なる人の、傲慢心を抑へ、以て清涼劑を投ずるものならずや。嗚呼平等差別の二門は、實に圓

融無碍の妙理にして、平等を以ては上を抑へて、下を揚げ、差別を以ては貧人を訓へて富者を誡む、斯の如く、鹽梅調和互に相提携して、社會の幸福と世の增進とを、見ることを得ん。諸君深く之を思へ。

予の前來の所論を約言すれば、資本家にせよ地主にせよ、紳士富豪にせよ、上に立つ者富豪の人に、平等の見地に立つて、而も慈悲の心を忘るゝ勿れ、また勞働者にせよ小作人にせよ、臣妾奴隷の徒にせよ、下にある者貧賤の人に、差別の心を持つて、而も勤儉の美風を忘るゝ勿れと、云つたのである。猶、言を換へて云へば、富貴の人も、差別平等の兩面を觀察せよ、貧人も亦、平等差別の兩方面を深く思ひ見よ、と云ふにあり。予は予の所論を以て、盡くせりとは云はず、また思はず、只今日までの研究の結果を發表して、諸君の一餐に供した迄でございます。諸君幸に之を諒せよ。演說は之にて御免。

天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國豐民安、兵戈無用、崇德興仁、務修禮讓。

大無量壽經

彼モナク此モナク一切平等ナル場所ニ、其處シキリヲ拵ラエ此處ニハ隔テヲ設ケテ自ラ窮屈ニ入ルヂヤ、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子ナルニ、其子供ガ互ニイサカヒセリアヒスルヂヤ、甚シキニ至テハ、人タル道ニ違ヒ自己心中ニ大安樂ノアルヲ知ラズニ迷フテヲルヂヤ。

慈雲 律師

婦人の三大時期

（明治三十七年十一月二十八日於薩摩國勝目教場婦人會演說）

見るが内に娘が嫁ご花さいて
かゝご凋れて婆々ごちりぬる

成程、婦人の一生をザッご云つて見れば、こんな者でございませう。同一婦人でありながら、娘ご云はれ嫁ご云はれ母ご云はれ婆々ご云はれます。昨日まで娘であつた者が今日は嫁さんである、嫁であつた者が直ぐ母親に成ります、母親であつた者が直ぐ婆さんご成るのである。中々時ご云ふものは早いものである。が、今日は暫く之を三大時期ごして、御噺する考でございます。

一、娘時代

二、嫁時代

三、母時代（婆々を攝す）

私の理想私の希望は、娘ごしては淑女たれ、嫁ごしては良妻たれ子の母ごしては賢母たれである、謂ゆる良妻賢母主義で、此位の覺悟この位の理想が、諸姉に於てなくては、二十世紀の舞臺に立て、事業をなすことは出來ないだろうご思ひます。

凡そ婦人ほご社會に邪魔に成るものはありませぬ、しかし邪魔になるご同時に、婦人ほご世界に必用缺ぐべからざる者はないのでございます、何故邪魔になるか、男子の心を奪ふからである、男子の失敗するは、多く彼が爲である、併し勿論男子にも罪はあるのである、毒を藥にすることを知らぬかでらある、婦人ほご世界に尊い者

はないのである、古から婦人の腹を借らずして生れた者はないのである。之は誰も能く知つてゐる話でございますが、一休和尚ある時道を通行せられたところが、その道側で女が小便をしてゐた、一休は之を合掌禮拜して通られた、そこで他の人が之を不審がつて其譯を問ふたれば、和尚こり敢へず

女をば法の寶と誰が云ひし
釋迦も孔子もヒヨイ〳〵と生む

と、答へられたのも此の道理からである、如何なる人も婦人の腹から出ない者はない、されば婦人といふ者は別して大切な者である、大切であれば有程、その責任といふ者が重いのであることを、忘れてはなりませぬ。

何れの國に於ても、今日は外務大臣と内務大臣といふ者があつて内治外交を司つております、之は内外共にやることは難事であるから、その仕事を分けてやるのである、いま一軒の家と云ものは、一國を見た樣なものであつて、また外務と内務との二人の大臣が必要である、そこで

男子―夫―外務大臣
女子―婦―内務大臣

とでも云ふべきでございます。外務大臣も中々六ケ敷のであるが、無論内務大臣の仕事も易くはございませぬ、今日は外務は問題外であるから、外交は秘密として、專ら内務の方を申上ます、若も内務大臣が確りしてゐて呉ないと、家と云ふものは倒れて仕舞ます、そ

の六かしい内務大臣の仕事を、甘く料理して行くのが即ち手腕手際こいふもので、茲で初て一人前の婦人こいふことが出來るのでございます。さて話は前に歸りまして、三大時期について御話を致しませう。

一、娘時代

元來娘時代に於ては、諸姉も御存知の如く、物を仕入る時代でございまして、學問技藝色々ございます、立派な菓實を結ばせやうと思へば、十分に肥料を入れねばなりませぬ、なか〳〵六かしい時代であるが、併し大切な時代であるから、注意に注意を爲ねばなりませぬ、いま令孃として恥しくない一通りであると云位の資格は、どんな者であるかと云ふに、なるほど容色も美しいに越したことはないが、併し容色ばかり美しくても、精神の養いは出來ておらず、身體の躾も整うておらず、謂はゞ造糞器械製子道具でも困る。また世の中には得てして容色も惡い、精神も曲つておる、その上、技藝も學問も出來ぬと云女がありますが、是等は女こいへば女、實は人三化七の怪物でございます、が、之ではならぬ、何を一つ取ることろがなくてはならぬ。まづ學問の點から云へば、少くとも高等小學位は濟させて貰ひたい、もつと慾を申しますれば、女學校位は卒業させて頂きたい、併し私は彼の世間に往々ありまする、星や堇菜こ飛廻る御轉婆娘や、口に喋々喃々こ囀り廻す生意氣女には、贊成することは出來ませぬ、又技藝こしては、裁縫織物料理、立華生花和歌、茶の湯唱歌音樂等、是位の道の大意丈は、會得させて置ねば、

謂ゆる淑女といふことは出來ぬ、無論之に加ふるに、心の正しいと云ふことは、第一の條件でございます。

二、嫁時代

次が嫁さん時代であるが、この時代が一番に面倒である、何故なれば、嫁と云者は外でもない、親しい父母の膝下を離れて他人の家に至り、舅姑と云者に仕へ、夫に仕へねばならぬからである、中々に六かしい、大抵の御婦人が一軒では濟ない、三軒も五軒も御出なさる樣であるが、種々の事情は有りとするも、多くは忍耐と云ふものがないからである、古人は忍は衆妙の門とも云ひ、忍は自在の基とも云つております。

昔、面白い話があります、二疋の鼠を二本の竹筒中に入れておきまし

たら、一疋の方は、一生懸命精出して、竹の筒の横側を喰破り遂に目的を達して外に出で自由の身となつた。然るに他の一疋の方は、竹の筒を竪に破つたものであるから、一つ破れば又一つの節があると云ふ有樣で、三つ四つ五つと喰破る内に、遂に根つき命終つたと云ふことであります。

之は只一場の偶話かも存じませぬが、併し我々人の身の上には、之に能く似た咄は多く有るのでございます、何事でも竪に行くと横に超にるとは、大變に區別があります、いま嫁入するのもそれで、一軒で濟ぬと云ふことはない、勿論初め行くときに、十分の吟味を爲ねばならぬのである、そこで良妻として夫に仕へる道は、どんな者であるか、内務大臣としての仕事は、どんな者であるかと云ふに

茲に於ては、私は佛教中に求めて云はねばならぬ、妻が夫に仕へる道は佛教では、優婆塞戒經といふ御經に說てあります、夫には十四の義務が有ると云つてあります、今は其個條を擧げ、中について、極めて必用な者丈を一言辯じませう。

一、作す處は心をつくして之を營め。
二、常に作して懈怠らず。
三、作す處は必ず終あり。
四、疾く作して時を失はず。
五、常に賓客を瞻視せよ。
六、其房舍臥具を淨めよ。
◎七、愛敬にして言語即ち柔輭なれ。
八、奴婢を愛憐せよ。
◎九、能く財物を守護せよ。
◎一〇、能く夫の敎誨に從へ。
一一、晨に起き夜に寢ねよ。
一二、能く淨食を求めよ。
一三、能く夫の惡事を覆へよ。
一四、能く夫の病苦を瞻視せよ。

右の內、內務大臣としては範圍も廣いが、夫に仕へる方にて申せば、常に財寶を保護し、能く夫の敎を守り、常に慈愛尊敬の心を失はず、顏色を和げ詞靜にせよとのことである。思ふに人の妻として、是れ良妻と云つて可ならん。

三、母時代

次が母親時代である、この時代に於ては、重き任務が、二つある樣でございます。

第一は胎内教育である、胎内教育とは、腹の中にをる子供に教育するのでございます、懷胎してからと云ふものは、別して慎まねばなりませぬ、何となれば、母親の思ふこと云ふこと爲すこと、みな胎内の子供に影響するからでございます、一例を擧げて申しますれば、

昔、愛蘭土、にキャテ、メレーと名くる二人の娘を持てる婦人がございました、妹メレーは、至つて溫順なる性質なるに引換へ、姉のキャテは、極めて荒々しく、動もすれば妹メレーを打擲せんと致します、その性質の餘りに異なるが故、或人之を不審に思ひ、其婦人に兩人の胎内にありし時の有樣を問ひしに、その答に曰く、姉の胎内にありし頃は、夫、他に情婦を持つて、家にあること稀なりし去れば妾の心中燒くが如く、嚙みつく程に思ひしことも度々ありしが、妹在胎の時は、夫も前非を悔い家業を勉强し、妾を待つこと至れり。

こゝ、これ其一例を擧げたる迄である、もし支那にせよ我國にせよ例をあげて來たならば、隨分に澤山あることであろうと存じます。兎に角、母親の一擧一動は、胎兒に影響するものでありまするから胎内教育といふことを、忘れてはなりませぬ。

第二は家庭教育である、家庭といふものは、母親となる人が、最

も杖となり柱となるものであるから、十分に注意して貰はねばなりませぬ、いかに學校の先生方が、子弟に立派なことを教へて呉れても家庭の王と稱せらるゝ、母親が「ペケ」では駄目である。

或處に面白い咄がございました、夫は母親が頻りと三味線を彈いて「ストライキ、サリトハツライキ」と云、拙劣極る俗歌を稽古してゐた、すると娘が小學校から歸つて來て、阿母さん、學校の先生は「ストライキ節」を歌うてはならんと、云はれましたと云つたれば、その母親の曰くが面白い、阿母さんは、學校の生徒ぢやありません。

と、云つたと云ふことを聞きました。又

或田舍の學校で、一生徒に先生が向つて、其元の姓名は何と云ひ

ますかと尋ねたれば、一生徒は直ちに起立して答へた、私には名前が二つあります、學校では吉本九市でありますが、家庭にかへると「コンナ餓鬼」と呼ばれます。

と、申したとのことでございます、是等はホンの一二の例であるが、いかに學校の教育が立派でも、先生が口を酢くして云つて聞せて呉れても、子供は家にかへれば駄目である、無教育極る母親のために、搔き亂されて仕舞のでございます。そこで私は諸姉に、母親としては、胎内教育と家庭教育との二つの重き任務あることを、覺悟して貰はねばならぬと云ふのでございます。併しこの責任の立派に出來るは、何に由るかと云へば、嫁として立派である、娘として立派であつた者でなければ駄目である、娘さんも嫁さんも、已に母

となられた御方も、胸に手を於て考へて貰ひたいのでございます。

英語では、妻女のことを「ワイフ」(Wife)と申してをります「ワイフ」とは、織出すと云ふ意味であると云ふことであるが、中々に面白い、諸姉よく考へて御覽なさい、釋迦といふ立派な如來樣も、孔子といふ聖人も、正成といふ湊川に神樣に祭られてある大忠臣もみな婦人が織出したのではありませんか、今日監獄に柿色の衣服を着て、鐵鎖に繋れてをる人も、みな女が織出したのであります。諸姉の精神次第であります。諸姉の精神において、高尚なる優美なる風雅なる、慈愛ある金剛堅固の信念さへあるならば、佛樣を生むことも出來る、神樣を生むことも出來る、英雄豪傑をも大哲學者をも生むことが出來るのであるから、どうか立派なる信念に住して頂きたい、然らば國家の礎となる樣な、豪い人物も出來るのである、之が卽ち賢母である、國家のために立派な人を出すのは、聽て宗教の爲でもあるから、之が眞宗に敎ゆる處の立派な婦人である、妙好人である、希有最勝人である、卽ち賢母でございます。茲に於てか、婦人としては、娘時代から嫁さん時代、母親時代を滿足に通りた、完全なる婦人であろうと思います。願くは諸姉は、この三時代に能く〳〵御注意なさつて、身體の手入せらるゝと共に、精神の修養を御忘れなさらぬ樣、深く希望いたす次第でございます。

惡人正機に對する吾人の立脚地

（明治三十八年十月十五日於薩摩國甑島長濱説教場爲有志者講話）

今日は惡人正機といふことに就いて御噺することを、過日約束しておきました、而も其要求は、古き命題を捕へて新しき説明を與へよと云ふことであつた、隨分六かしい注文であるが、併し出來る丈は遣つて見る考である、實は昨夜草稿を立てたばかりで、まだ十分こは思へない處もあるから、諸君の御訂正を願いたいのである。

凡そ此の世界において、分り切つてをる樣で、しかも明了に分つて居ないものが澤山あるのである、淨土眞宗における惡人正機の問題の如きも其一であるが、僧侶は口僻のやうに惡人正機を辯ずる、

同行は耳に「タコ」が出來る程、之を聞いてをる、而も明確こ水際立てゝ説明する人は少ないのである、勿論私が御噺しても、明晰に水際を立てゝ、直に分るやうに説明することは出來ませぬ、只御淺をすると思ふて聞いて貰ひたいのである、之を御噺するに當つて、便利上私は左の五項に分けておきます。

一、罪惡の定義。
二、惡人正機の文據。
三、救濟の成立は罪惡を豫想する所以、及び佛凡の一致。
四、局外者の批難。
五、批難に對する吾人の辯駁卽ち立脚地を明かにす。

一、罪惡の定義。

元より罪惡と云へば易いやうであるが、如何なる者が善か、如何なる者が惡かと、云ふことを調べて見ると、隨分六かしいのである今世間の學說を一瞥しますると、善惡には標準なしと云說と、有りと云說の二に分れておる、その有りと云說の中に於ては、天神、天命、君主、道理、道念、自利、利他、功利、進化、本能滿足等の諸說がある。併し今は之が是非を論ずるの遑はない、若し夫れ佛教上に於て善惡の標準を求めんか、自利々他を善とし自損々他を惡とすると云ひ、また人天等に生るゝ法を善として白法と名け、地獄等に墮る法を惡として黑法と名くと云ひ、また此世他世を饒益するを善とし、之に反するを惡とすると云說等、種々に有ります、今私の罪惡に對する考は、罪惡とは善の裏である、言を換へて云へば、不善を爲すは皆罪惡であつて、善い事に背くのが皆罪惡であろうと思ひます、その罪惡を行ふ人を惡人と云ふのである、勿論その惡人といふことにも程度はある、輕いのも重いのもある、淺いのも深いのもあるが、等しく罪惡には相違ないのである。現今我國に於て、罪惡の人を罰する法律は澤山あるが、約り自由刑と死刑である、こう云ふ惡いことをすれば三年とか、こう云ふ惡いことをすれば七年とか有期徒刑とか無期徒刑とか、甚しきに至つては死刑をも執行する、之は罪惡ある者を拘束監禁して、その自由を奪ふのである、死刑は人間最後の自由を奪ふのである、之が刑法の効力であるが、狹いものである、成程人間の行爲に表はれた事實に對しては、罰することも出來るが、併し虎狼の心を持つておる惡人でも、行爲として身體

に表はさないときは、罰することは出來ないのである、これ法律なるものが、人間の心を支配することが出來なくて、國家は必ず宗教に依賴しなければ成らぬ所以であります。

いま通佛教の上で、罪惡と云ふ觀念を研究して見ればやはり、之にも度合がある程度があるのである、十惡と云ひ五逆と云ふ、みな一々に區別があるのであるが、約り自分の身口意の三業に由つて爲すのである、乃ち左の如し、（三業の善業もあれど今の所論にあらず）

- 身業
  - 殺生
  - 偸盜
  - 邪婬
  - 行爲に犯す罪惡
- 十惡
  - 語業
    - 妄語
    - 綺語
    - 惡口
    - 兩舌
    - 言語に犯す罪惡
  - 意業
    - 貪慾
    - 瞋恚
    - 邪見
    - 意志に犯す罪惡
- 三乘五逆
  - 殺父
  - 殺母
  - 殺羅漢

右の區別は析玄記に據る。

- 破和合僧
- 出佛身血

右は最勝王經の疏文の取意なり。

- 大乘五逆
  - 破燒塔與經藏及盜三寶物
  - 謗三乘法言非聖教
  - 令呵責出家等打罵斷命
  - 殺父母出佛身血破和合僧殺羅漢
  - 謗無因果常行十不善業

右は薩遮尼乾子經の取意の文なり。

是等十惡五逆のことは、今一々説明しておる暇はありませぬが、要するに我々の身口意の三業に於て、日々夜々に作りつゝある處の

ものであります、身體で作らなければ口において作り、口で作らなければ心で作ると云ふやうに、何れかで作つておるのである。善導大師は、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と仰せられた、成程罪惡の塊の凡夫である、凡て世界の人は罪人である、惡人である、別して我等は、五逆十惡具諸不善の罪人である、人間のなかで撰屑である嗚呼我等は罪惡の凡夫なり、晝夜自己の罪に泣いておる者である。この罪に泣くの我等は、遂に助けられざるか、否々自暴自棄するなかれ、先、我等を呼び玉へる佛陀救濟の聲に聞け。

二、惡人正機の文據

前段において、吾人は罪惡に泣きつゝあることを申述ましたが、然るに淨土眞宗においては、この罪惡ある吾人を、第一に救濟して

下さるのである。いま惡人正機の文は、隨分澤山にあることであるが、其中の一三を引いて見ませう、先、觀無量壽經の下々品には

或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善如此愚人以惡業故應墮惡道經歷多劫受苦無窮如此愚人臨命終時遇善知識種々安慰爲說妙法教令念佛此人苦逼不遑念佛善友告言汝若不能念者應稱無量壽佛如是至心令聲不絶具足十念稱南無阿彌陀佛稱佛名故於念々中除八十億劫生死之罪命終之時見金蓮華猶如日輪住其人前如一念頃即得往生極樂世界

とある。次に善導大師の玄義分には

諸佛大悲於苦者心偏愍念常設衆生是以勸歸淨土

亦如溺水之人急須偏救岸上之者何用濟爲

とある。次に法然上人の選擇集には

淨土宗意本爲凡夫兼爲聖人

とある。即ち本爲凡夫兼爲聖人とは是事である。次に吾祖師親鸞聖人の上に來ては、數多くありまするが、先、正信偈には、源信和尚の往生要集の意を取り來つて

極重惡人唯稱佛　我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見　大悲無倦常照我

とこしてある。之を高僧和讃には

極惡深重ノ衆生ハ　他ノ方便サラニナシ
ヒトヘニ彌陀ヲ稱シテゾ　淨土ニムマルトノベタマフ

ご和げてある。次に歎異鈔には

善人ナヲモテ往生ヲトグ、イハンヤ悪人ヲヤ。シカルヲ世ノヒトツネニイハク、悪人ナヲ往生ス、イカニイハンヤ善人ヲヤト。コノ條一旦ソノイハレアルニタレドモ、本願他力ノ意趣ニソムケリ。ソノユヘハ自力作善ノヒトハ、ヒトヘニ他力ヲタノムコヽロカケタルアヒダ、彌陀ノ本願ニアラズ、シカレドモ自力ノコヽロヲヒルガヘシテ、他力ヲタノミタテマツレバ、眞實報土ノ往生ヲトグルナリ。煩惱具足ノワレラハ、イヅレノ行ニテモ生死ヲハナルヽコトアルベカラザルヲアハレミタマヒテ、願ヲオコシタマフ本意悪人成佛ノタメナレバ、他力ヲタノミタテマツル悪人、モ

ト、モ往生ノ正因ナリ。ヨテ善人ダニ往生ス、マシテ悪人ハト、オホセサフラヒキ。

ごある。次に蓮如上人の御文三帖目には

抑諸佛ノ悲願ニ彌陀ノ本願ノスグレマシ〳〵タルソノイハレヲクハシクタヅヌルニ、スデニ十方ノ諸佛ト申ハ、イダリテツミフカキ衆生ト、五障三從ノ女人ヲバタスケタマハザルナリ。コノユヘニ諸佛ノ願ニ阿彌陀佛ノ本願ハスグレタリトマウスナリ。サテ彌陀如來ノ超世ノ大願ハ、イカナル機ノ衆生ヲスクヒマシマスゾトマウセバ、十惡五逆ノ罪人モ、五障三從ノ女人ニイタルマデモ、ミナコト〳〵クモラサズタスケタマヘル大願ナリ。

こあるなり。

是等の文は澤山にあることであるが、其要とするところは、我等のやうな罪惡の人間を救濟して下さるための、保證であるといふことさへ分れば、宜しいのである。五逆十惡具諸不善とは我等のことである、常沒の衆生と云ひ極重の惡人と云ふ、みな我等を云つたのである。その罪惡に泣たる我等は、今や彌陀の攝取の光明によつて助けらるゝ身分とはなつた、然らば我等は如何にして、彌陀の救濟を得るかを論じなければならぬ、そこで私は、

三、救濟の成立は罪惡を豫想する所以、及び佛凡の一致

と云ふことを論究せねばならぬ。佛凡の一致とは、佛陀と吾人とが契合することと一致することである、即ち罪惡のある極重の惡人が佛陀に助けらるゝこと、罪惡の淵に泣いておる吾人が、彌陀の本願他力によつて救濟せらるゝことである。

抑も、助らるゝと云ひ救濟せらるゝと云へば、已に或者が二つあるのである、乃ち助ける者と助けらるゝ者、救濟する者と救濟せらるゝ者との是の二つである、即ち助けて下さる彌陀と云ふ慈悲の塊、大悟徹底の佛陀と、助けて頂く罪惡の塊、三界流轉の迷いの親玉、深き淵に沈んで罪に泣處の吾等の二つの者である。それ救濟すると云ひ助けると云ふ、如何なる者を救濟するのであるか、無垢の善人を救濟するか、水に溺れておる者でなく岸上に立者を救濟するか、何ぞ然らん左樣ではあるまい、即ち水に溺れておる者、罪に泣者を救濟する必用があるのであろう。已に救濟すると云ひ助けらる

ること云ふ、罪惡のあることを豫想せるにあらずして何ぞや。智慧の眼は閉れておる、戒行の足腰は立たない、而も身で遣ること口で云ふこと心で思ふこと、みな罪惡を作りつゝあるのである、實に一文なしの貧乏人である、貧乏人なればこそ、救濟する必用があるのである、助けて貰ふに趣味を生ずるのである、吾人は實に罪惡を有す罪惡を有する吾人は、吾人を救濟することは出來ない、故に罪惡なき悲智圓滿の佛陀、十方衆生を一子の如く憐念し賜ふ如來、別して極惡深重の吾等を助けて下さる阿彌陀佛の、他力に縋らねばならぬことであります。

如此に申しますと、甘く聞けば何の弊害もないが、惡く聞くと直ちに社會に害毒を流すのである。そこで私は

四、局外者の批難

の聲を聞かねばならぬ、曾て私にこう云ふことを云つた人があつた「佛敎殊に淨土眞宗の敎ほど國家に害あるものはない、社會に毒を流すものはない、彼等は常に惡人正機と云つておる、凡ての惡人有ゆる罪人は、彼等の正客ごすると云ふ古語があるが其通りで、一點水があるから、目を惡くしても樺はない、健腦丸があるから、腦を無茶苦茶に使つても宜しい、バルサンがあるから、婬賣も買ふべしと云ふ風情で、竊盜、强盜、詐僞、强姦、殺人、賭博、何でも有りと有らゆる罪惡を犯して、ごゞの約りは、斯る罪業深重の者でも、助けて下さるは阿彌陀佛ばかりなりで、最後には逃込のである、故に眞宗の敎は、國家を益するに

あらずして、國家を害するなり、その弊害の及ぶところの大なることは、實に社會黨よりも無政府黨よりも、最も恐るべきものである云々」と。斯樣に私に云つた、私は之に對して、一言せねばならぬ乃ち

五、批難に對する辯駁、即ち吾人の立脚地を明かにする必用があるのである。餘り長くなりまするが、もうしばらく御辛棒を願ひます。

批難せられたる趣は、一々道理である、私も御同感である、實に國家を亡ぼす者は淨土眞宗である、社會を害毒する者は惡人正機の敎である、然れども是れ皮相の見である。管の穴から天を見て、天は狹しと云ふと同一般である。淨土眞宗の敎はそんな不合理のもの

ではない、吾人は今、吾人の之に對する立脚地を明かにするの責任あることを信ず、故に少しく述べて見ませう。

莊子のなかに「醫門ニ病多シ」と云ふ言があつたと思ふ、之は良醫の門には、病人の絶間なく來ることを云つたのであるが、成程左樣である、藪醫者の門には、藪に緣ある竹に雀と云ふことでもあるまいが、門前雀羅を張ると云ふ有樣で、一人も病人の出入を見ないのである、醫者の門に病人の多く出入するは、その醫者の良しき謂ゆる國手であることが、分るのである。

いま、宗敎と云ふ醫者の門に、罪惡に泣き叫ぶ病人が、多く出入するは、是れ取りも直さず、その宗敎たる醫者が、良醫で國手であるからである、宗敎の門に入り來る者は、心の病人か身體の病人かで

ない者はない、凡ての人が重大なる罪惡を持てる病人であるのである、その重大の病人が、一旦宗教の門に入れば、その罪は消滅するのである、然れども之は過去における罪惡の消滅である、之がために、未來における凡ての罪惡をも、爲せよ作れよと云ふのではない

「藥アリ毒ヲ好ム」的の者は、眞宗の信者ではないのである「藥アリトモ毒好ムベカラズ」と云ふが、吾人の立脚地である、茲が大事なところであるので、能く〳〵聞分けて貰はねばならぬ。

末燈鈔には

ナニヨリモ聖教ノヲシヘヲモシラズ、マタ淨土宗ノマコトノソコヲモシラズシテ、不可思議ノ放逸無慚ノモノドモノナカニ、惡ハオモフサマニフルモフベシトオボセラレ候ナルコソ、カヘス〳〵アルベクモ候ハズ、乃至、凡夫ナレバトテ、ナニゴトモオモフサマナラバ、ヌスミヲモシ人ヲモコロシナンドスベキカハ、モトヌスミゴ、ロアラン人モ極樂ヲヲガヒ念佛ヲマフスホドノコトニナリナバ、モ下ヒガミタルコヽロヲモ、オモヒナヲシテコソアルベキニ、ソノシルシモナカラン人々ニ、惡クルシカラズトイフコト、ユメ〳〵アルベカラズ候。云々

と、時間の前後について述べてある、信心決定の後にも、惡苦しからずこの仰せではない、後念相續に渡りては、小心翼々として、佛陀の冥見に恐れ入らねばならぬ。

善導大師は、已造業未造業と云ふことを分別して說明せられた、

已に造つた罪は仕方がない、その已造業の病氣は、眞宗の門に入れば、惡人正機の手際によつて、直ちに全快させて下さるが、未だ造つておらぬ未來に向つて、好んで惡を造つてはならぬ、他人の物は塵一本でも取つてはならぬ、生あるものは蟲一疋でも殺してはならぬと、御戒め下された。

これ今日より過去における罪惡は、仕方がない、その病氣のあるものは、直ちに來たれ、我必ず其病根を斷滅して吳んと、救濟して下さるのである。然れども今日より未來に對しては、決して罪惡を犯してはならぬと、教戒したものである。

之を要するに、惡人正機に對する吾人の立脚地は、一人々々の各自について云へば、今日より過去に對しては、罪惡に泣く人を正機

正客として、救濟し賜ふのである。即ち惡人正機は、一念歸命の安心上にて、論ずることである。若し夫れ、後念相續の邊より云はんか、之を論ずるの餘地なし、然り今日より未來に對して、猶も罪惡を敢て造らんとする者は、緣なき衆生である、これ論外の徒である。然れども諸君思へ、眞實の行者にして、未來に向つて、再び罪惡を敢て行はんとする者、果して有りや否やを矣。

善根スクナシト云ハントスレバ、一念十念モル、事ナシ。罪障重シト云ハントスレバ、十惡五逆モ往生ヲ遂グ。人ヲ嫌ハントスレバ、常沒流轉ノ凡夫ヲ正シキ器トセリ。

（法然上人和語燈錄）

噫!! 親鸞聖人

（明治三十九年七月二十八日於薩摩國知覽説教場青年會講話）

今日は青年會の當日でありますが、丁度月の二十八日に相當しております。諸君淨土眞宗に流を汲んでおる者は、必ず忘れてならぬ聖日はと云へば、卽ち此の二十八日ではありませぬか。本山別院を始め寺院敎場に至るまで、謹んで相營む祖師親鸞聖人の御命日である。この忘れてはならぬ祖師聖人の聖日にあたり、吾人は祖師聖人を話題として、思ひ浮んだことを、御話して見やうと存じます。

聖人の在世は如何

吾人は聖人を味ふに、在世と滅後とに分けて、御話して見たいと存じます。聖人の御誕生は、人皇八十代高倉院の御宇承安三年四月朔日でありまして、御入滅は、人皇九十代龜山院の御宇弘長二年十一月二十八日、滿九十歳を一期として御往生なされた、すなはち今明治三十九年を去ること六百四十五年前であります。皇太后宮の大進藤原有範卿の御子で、幼名を松若君または十八公麿呂と申したてまつる。

自己の修養

聖人九歳の春、慈鎭和尙の門に入り御出家なされた。聖人の御出家は夜中になされたのである、養父範綱卿が一日のことはないから、明朝でも參りて剃髮するが好いと申されたけれども、聖人は御聞なさらぬ「明日ありと思ふ心は仇櫻、よるは嵐の吹かぬものかは」と、仰せなされて、遂に夜中に參りて御出家なさ

れた。この歌を聖人の御詠と云者と、古歌であると云者とあれども吾人は何れでも構はぬ、たゞ時と場合とに應じて。かゝる歌を思ひつかれたを、偉とすれば足るのである。もし之が通常の人の子なれば、九歳位では、まだ青鼻を垂してゐる時代なれども「栴檀ハ二葉ヨリ香バシイ」で、聽て一大偉人と成る人は、幼少の時から、何處かに異なつた處がある。夫から間もなく、學問するには叡山に登らねばならぬとの御考へから、登山授戒なされた、叡山に於ての御勉强ぶりは御修行といひ、その御難義は隨分長い間で、實に二十ケ年の歳月である。その間といふものは、謂ゆる自己修養時代で、我未來の決定にあつた。すなはち佛一代の諸經を御覽なされ、多くの論釋に眼を注がせられてあるが、まづ天台に於ては卽身成佛と立て眞言に於ては父母所生身卽證大覺位と教へ、華嚴に於ては初發心時便成正覺と立つ、煩惱卽菩提生死卽涅槃と了達すれば、煩惱の其まゝが菩提、生死の迷が其まゝ證なり、父母より受けたる此の肉身に、直ちに五智の寶冠を現じて、大日如來毘盧舍那法身の形を顯はすと敎ゆる等、何れも法門は立派なれども、これらは宿世に根熟した上機の者でなくては證ることは出來ぬ、況んや末代下根の人、いかでか此等に指を染ることを得ん。殊に女人の身は、比叡の山は一乘の峰たかく聳つゝいへども、五障の雲たなびくことなく、一味の谷ふかく譬ふゝいへども、三從の水ながるゝことなし、高野山は眞言上乘繁昌の地にして、三密の月輪あまねく照らすゝいへども、女人非器の暗をば照らさず、五瓶の智水ひとしく流るゝいへども、女人垢

機の姿には注がず。去ば法門は高いが下機を攝せず、月は高く朗かなれども唯之を眺むるのみ、花は美しいへども梢高きを如何せんの憾がある、わが聖人の如き父母なく、妻子なく(此の時代に於て)一切の煩累を離れて、讀書萬卷、しかも二十年の其間、難作能作の修行を積せられた御方でも、オイソレと現身に煩惱即菩提この身すなはち是佛と、相にあらはすことは、出來なんだ。そこで之では出家した所詮がない、人を度するはさておいて、我身をさへ度することが出來ぬ。何でも末代下根に相應した、在家も出家も男も女も、共に等しく成佛の出來る、廣く深く多く人を利益することの出來る近道の教は無いものかと、根本中堂の藥師如來や六角堂の觀世音菩薩に、有緣の法を求め、觀音の御告によつて、遂に斷然叡山を辭し官も位も學問も皆うち捨てゝ、吉水の禪房に入り、法然上人の御弟子となられた。

諸君、一口に云へば二十年でありますが、十年一昔ごさへ申しますれば、中々長い時間であります。文明の今日、進歩した大學を卒業するのでも、十七八ケ年も懸れば出來ます、しかし夫でも容易ではない。然るに二十年の其間、一意專心に自己の修養を積せられた聖人は、實に偉丈夫ご云はねばならぬ。今日世人は、黃金さへあれば學問は出來る。學校卒業も爲し得るご考へておるが、之は未だ一を知つて二を知らぬ者である。元より資金も必用であるが之ご同時に、身體が健康でなくてはならぬ、身體が頑强にさへあれば、學問が出來るごすれば、角力取なごは最も適當のやうであるが、然らず

之と同時に知識能力を必用とする、讀書しても理會する丈の頭がなくてはならぬ、猶その上に事故なきを要する、父兄などが達者でゐて留守を守つて呉れねばならぬ、狠顧の憂があつては勉强は出來ませぬ、しかも本人の酒色に溺れず意志の强固を要することは、勿論のことである。如此今日組織立つて社會において、學校にさへ入れば、學問は出來る卒業は出來ると思つても、それは大早計であつて是非とも上に列擧した四五の個條は必要なのであります。況んや今より七百年の昔、社會の秩序整はぬ時代において、二十年間も自己の修養を積せられた祖師聖人の、意志の强固と勇猛精進の御心に至りては、吾人は恐れ入らねばなりませぬ。然るに一朝之はと氣が付なり、心機一轉、今までの官職や位階は申すに及ばず、智慧も學問も皆うち捨てゝ「よみすてし萬の文の塵は皆、よぶ六文字の外なかりけり」と、六字の御名に歸り、他力易行の道に入らせられたは、内に燃ゆるが如き信仰がなくては、出來ないことであります。

當時の僧風　吾人は、中古日本佛敎僧侶の有樣を、一言せねばならぬ、白河法皇の御詞に「天下意ノ如クナラザルモノ、惟鴨河ノ水、雙陸ノ采、山法師ノミ」とある。京都の加茂川の水は、北から南に流れておるが、之を南から北に流すことは出來ぬ。雙陸の采といふものは、三を出さうと思うても、二が出たり、一を出さうと思うても四が出たり、五が出たりする、之は人間の力では如何することも出來ないものである。山法師といへば叡山の僧徒で、寺法師といへば三井寺の出家であるが、法皇の御力でも、山法師を自

由に動かすことは出來なかつたこと見ゐます。如何に當時の佛敎が盛大で、また僧侶が亂暴狼籍であつたかと云ふことは、是丈でも能く分ることであります。　法皇は、皇帝並に法皇として、政治を躬ら爲したまふこと五十餘年、しかも此間において、叡山や三井寺の戰爭、興福寺や東大寺の合戰、その他宗門に關して、兵火の間に見ゐ法皇の御心を惱せしこと十二回ある、また山法師の嗷訴も度々ありますが、若夫、中古五百餘年間の歷史に涉りて、詳しく調べたならば、隨分澤山なことでありませう。法皇親政五十餘年、世壽七十七にして、而も天下意の如くならざるもの〻一が、山法師とあれば、如何に叡山や三井寺を初め、南都の僧徒共が、宸襟を惱せ奉りたかゞ分る。

祖師聖人の御出世は、人皇八十代高倉院の御宇であるから、白河帝を後る〻こと八代、また御在世は九十年であるから、高倉院より　龜山院に連り歷朝十一代である。されば聖人と法皇とは、年代が異なつておるから、敎界の有樣も變化して居るかと云ふに、決して然らず、法師原の權威を逞うし、橫暴を極めたことは、中古一貫せる事實である。

當時叡山は三千坊と云うて、この山ばかりに三千の寺が有つたのである、一つの寺に三人づ〻僧徒がおるとしても、一萬人ばかりはおるので、主上であろうが、將軍であろうが、大臣宰相であろうが自分の心に叶はねば、直に神輿を擔ぎ出すといふ騷動、坊主頭に鉢卷して、法衣の下に鎧を着て、薙刀小脇に抱込で、何時でも合戰を

爲すといふ有樣、たまには眞面目に經論に眼を曝す者もあるかは知らねど、殆ど全くが僧正に成りたい、僧都に成りたい、いや緋の衣が着たい、紫の色が着たいといふ浮世の名利ばかりで、眞實自分の未來、衆生濟度といふ立派な僧侶は無いので、抑も出家した本領は那邊にかある、家を出でゝ山に入つたは好いが、山には矢張寺といふ家があつて騷いでおるのである。此頃の俗謠であろう「出家々々ご口には云へど矢張御寺に居やしやんす」と、謠はれておる。一言に之を云へば、當時の僧侶は、自己の本領を忘れて、腐敗墮落の底にあつたので、實に歎しき次第であります。

現今何れの社會階級を問はず、堅實の思想に乏しく、浮華輕佻を事としておる。從つて僧侶社會を見渡すに、昔は御院家と云へば、

高大な者であつたが、今は御院家ならざる御坊さんは、殆ど無いと云程の有樣である。甲の寺に藍海松茶色の精好を着て、得意がつておれば、乙の寺には栗皮色の法衣を着けて、スマシテおる、また丙の寺には薄青色の精好を着て、意氣揚々として居るではないか。南隣に院家に成つて喜べば、北里には飛越て別助音に成る、同じ巡讃に成るのなら、一日でも早く成らねばと、時間を法中同志で爭ふも席次に關する名聞がらである。僧侶同志が競爭する計でなく、無垢の同行までが渦中に捲込れて、安心沙汰は其方除にしておいて、檀那寺の噂で日を暮しておる。いや貴殿のこころの御院主の五條袈裟は、白離紋ちやが、宅の御寺のは、赤の離紋五條ですよ、いや白は男らしくて好い、いや赤は子供らしくて好い、なに宅の御院主のは

飛切だよ、金の離紋五條だよ、こ。口角泡沫を飛して相爭ふことは宗門繁昌の土地程、甚しいのであるが、併し之は末寺や同行の罪ではない、之を利用する者の罪である。しかも賢き時の當路者は、この堂班熱を利用するといふことを忘れたことはない、嗚呼、吁、何こか他に好い方法は有るまいか。布教勸學てふことは抑も第二義で人擧つて浮華輕佻を事こしておる、新發意の學資に五百金を投ずるは惜むが、堂班の昇進に千兩を散ずるは惜まぬ、なんと本末顚倒の世の中ではありませぬか。吾人は好んで世を惡罵し、人を攻擊する者ではない、只事實を事實として紹介する迄である。身に價値なくして何の金紋精好も價値があろう、何の助音巡讃も價値があろう、若し有りとすれば、开は人に有るに非ずして物に有るなり、人德なくして綾羅錦繡を身に着んか、何ぞ木猴や藁人形の着たる夫と異ならん、心せよや道に志ある者。汝の心の奥底に潜める惡德を捨ずや猜疑、嫉妬、奸詐、蛇蝎、我慢、勝他、名聞、利養その他數ふるに倦し、捨つ能はずんば、日夜に之を使用するに儉約なれ。噫、世は澆季とは云へ、人は下根とは云へ、三衣を着する身は、戰々競々四六時中、自己の修養を忘れては成りませぬ。

聖人の隱遁　「國亂レテ忠臣顯レ、家貧ウシテ孝子出ヅ」で當時の叡山の有樣を目前親しく御覽になつた祖師聖人は、もはや山に留るの勇氣はない、山に留れば位や官職や、徒に名利の爭ひを爲ねばならぬ、そこで隱遁するために山に入つた聖人は、眞の隱遁を爲すべく山を下るに至つた、私は之が大宗教家の本領だろうと思ひ

ます。隱遁こは、かくれのがるゝこ云ふことであるが、弘法、傳敎は山にかくれ、僧正遍照や西行上人、兼好法師の徒は、雲水行脚こなつて身を清くした。世間の上で云へば、殷の太公望は磻溪こ云處にかくれ、周の伯夷叔齊は首陽山にかくれ、秦の四皓は商洛山にかくれた。是等は皆、世の往來を厭うて然るか、失意の極然るか、自ら清うせんがため然るか、兎に角、自利が主こなつて居るのである吾人の見を以てすれば、眞の宗敎家や大隱遁者は、成程一旦は世を捨て山に入るが、再び世を救ふべく山を出るのである「大隱ハ城市ニ隱ル」で、小宗敎家や小隱遁者は、一度世を捨て山に入つたら出ることを知らぬが、大隱遁者や大宗敎家は、山にはおらぬ城市におるのである。自己の信じた處、自己の證つた處を、城市におる世人に傳へるのである、誰が詠んだか、祖師聖人の下山を詠じた歌がある「世のなかの人の心に變りけり、世を厭ふこて山を出たり」こ云ふのであるが、なか〳〵面白い歌である。聖人の隱遁は、叡山を下つて吉水に入つたのである、閑なる叡山を出て、ヨリ賑やかなる吉水に入つたのである。然れども深く思へ、隱遁は姿にもなく、處にもなく、全く心にあるものこすれば、名利に迷ふ叡山におるは、眞の隱遁にあらざることを。

利他敎化

如此にして聖人は、山を下つて吉水に入り、法然上人の御弟子こ成らせられた。乃ち台嶺にあつて、名譽赫々たりし御方が、墨の衣に墨の袈裟こ成らせられたが、是からが正しく衆生濟度で、利他敎化の處である。今迄は煩瑣の學問に、二十年の長年

月を送つたのであるが、法然上人の膝下に參りては、一朝にして他力攝生の旨趣、凡夫直入の道を御授りなされた、是を以て淨土門他力易行の御教、惡人女人が佛陀に爲て頂く、いこも尊き南無阿彌陀佛の六字の甘味を御弘めなされた。今日の如く瀧車や瀧船で旅行して、珍味美食に飽き、浮れぶし三分に講談三分、淨瑠璃二分に法門二分、こ云やうな說敎ではない、玉の御足に草鞋がけ、雪を褥に石を枕こ迄なされて、如來の御慈悲を肺肝より、吐露なさるのであるから、我も〳〵こ水の低きに就くが如く、謂ゆる貴賤輾をめぐらし門前市を爲すこ云有樣で、人みな淨土門に入るやうになつて來た。するこ、もこ〳〵眞の隱遁者でない、南北の學者を始め似而非法師共が嫉妬から迫害を加へるやうになつた。

肉食妻帶の公表並に御流罪

據て加へて肉食妻帶の公表こなる、すなはち祖師聖人は、師匠法然上人の御勸めに由つて、月輪殿下兼實公の姫君玉日の前こ御結婚があり、魚鳥の肉も苦しからずこて御上りになる、之は世人が、肉食妻帶もせぬ立派な淸僧ならば、往生も仕やう佛けにも成られも仕やうが、我等が樣な在家の者は、如何であろうこの疑ひを除くためである。この有樣を見て、世人は益々歸依する、歸依すれば歸依する程、山法師や寺法師共の迫害攻擊は甚しくなつて、遂に又例の御神輿騷動こなり、主上へ奏聞こなつて、其結果が法然上人や祖師聖人、其他數多人々の死罪流罪こなつたのである。ごうも世の中は妙なもので、正義や道理ある者が、常に勝つこ云譯に行かぬ、最後の勝利は兎も角も、一時は正が邪に

壓せられ、是が非に苦めらるゝことは、歴史上數多くあることである。見よ議會における議員の行動を、正々堂々たる正義の聲は、少數の議員によつて聞くことを得れども、常に多數醜類の壓する處となるにあらずや。豈に議會のみと云はんや、斯の如きことは、何れの階級、何れの社會を問はず、往々にして見る處の事實であります今しも時の朝庭は、亂暴なる山法師や奈良法師共を恐れたか、罪もない人々を土佐や越後に流し、又は首を刎ねたのである。聖人の御傳鈔を伺ふに「淨土宗興行によりて、聖道門廢退す、これ空師の所爲なりとて、たちまちに罪科せらるべきよし、南北の碩才憤り申しけり」とあれば、淨土門の繁昌を見るにつけ、自法愛染の心から嫉妬を起したものである。法然親鸞の徒は、一向專修と勸めて、他佛餘經を貶しめるのみならず、身に三衣を着しながら、蓄妻噉肉を敢てなすことは、これ獅子身中の蟲、佛門の外道なりと云ふ勢ひで、遂に彈劾するに至つたのである。諸君この肉食妻帶の公許は、日本佛教上においては、一大改革いな革命と云つても可いので、實に破天荒の事業であります。政府は明治五年四月第百三十三號において「自今僧侶ハ肉食妻帶等勝手タルベシ」といふ布告を、消極的にせよ出しておるが、私は寡聞にして、未だ各宗自ら肉食妻帶の公許を、出したといふことを聞きませぬ、彼等は肉食妻帶すれば、經論に反くとか儀式制度に關係するとか、思つておるのでありませう。況んや今より七百年の古において、公然肉食妻帶を行たのであるから、彼等近眼者流から、佛敵である、法敵である、佛敎の外道である、

生臭坊主であること、悪口雑言の上、死罪や流罪に迄させたのは、無理からぬことであります。しかし之は時機相應こいふことを知らぬからである。まことに念佛の法門は、末世に相應し根機に適合し、殊に肉食妻帶の宗風は、共に安樂に生ずる點において、人の疑惑を解く第一關門である。

若夫、肉食妻帶について其例を廣く求めんか、古來其例少からず、である、いま後學のため、試に詳しく之を説明せん、肉食妻帶の義諸經の上において、許せる處こ禁ぜし處こあり、これ開遮抑攝は佛教の常なるが、今之を許せる經文を擧んか、まづ肉食の方にては、根本毘那耶律の十七卷には、如來比丘に向つて、五つの食物を説せられたときに、一には麵を食ふ、二には米を食ふ、三には大豆を食ふ、四には魚肉を食ふ、五には餅を食ふこある、また比丘衆が、調菜には何を致しませうかこ問はれたれば、如來の御答へに、乳味酪味こあつて、牛の乳を搾りて菜に致し、又は蜂蜜の類、或は干魚を副て食よ、こ御説なされた。又おなじく十卷には、舍利弗尊者が中風を煩うて、右の手が甚しく痛んで難義せられたこき、如來は舍利弗の弟子達を召して、五油を飲せよ、其病が愈るであろうこ仰せられた、その五油こは、熊の油、猪の油、摩喝大魚の油、魚の油、驢の油、この五つの油を、尊者は飲れたことがある。又おなじく十四卷には、羅越祇城の節會の日、人々多く集つて、斟こ畜生の肉、並に魚の肉なごを、靈鷲山へ持參して、之を供養したれば、五百の阿羅漢、各肉食せられたこ載てある。四分律の四十二卷には、三種淨

肉を許すこと、一には殺すを見ず、二には殺す聲を聞かず、三には我ために殺すと知らずと擧げて、この三種の肉を食せよと說かせられてある。凡そ肉食の禁制は、涅槃の會座で始つたのであるから、涅槃經以前に入滅せられた處の、舍利弗目連波提等の歷々の羅漢達は、一生肉食を爲られたものと見ゐます。次に妻帶について云へば大無量壽經に列ねてある十六正士も、大論の上から見れば、何れも皆肉食妻帶の菩薩である。また大論三十五卷には、妙光菩薩須摩提に、妻ありしことが判じてある。其他淨名居士には妻あり、子あつて其名を無垢と名け傅大士には、不堅不正といふ二人の子があつた窺基法師羅什三藏みなこれ妻帶の人であります。我朝にては、頌德太子は佛法弘通の元祖なれども、是亦肉食妻帶である。元講釋書を

見れば、嵯峨の道明、東大寺の明一、元興寺の慈心房、みなこれ妻帶である。その外淨藏、澄玄、敎信沙彌の如き、何れも妻帶の僧であつた。中にも淨藏法師の如き、有名な知識で、勅命を受けて、八坂の法觀寺の塔の東へ傾いたを祈つて、其曲みを直さるゝ時、二人の我子を、膝の上に置いて、禱られたといふことである、面白いではないか。羅什三藏は知らぬ人もない、名高い天竺の高僧で、法を傳へんがために、遙々支那に來て多くの經論を支那譯した人である、手近いところが、眞宗の三部經のなか阿彌陀經を繙いて見れば、其初において、姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯とある、この鳩摩羅什とは、今の羅什三藏のことであるが、支那後秦の要堅帝即位の後智者の種を殘さんがために、后の內を十人まで送られた、然るここ

ろ什公この婦人達に契りを込て、四人の子を擧げられた、什公の門人三千人、其内最も秀でたる者十人、之を世に什門の十哲といふ、其中の四哲は什公の實子で、各維摩經を註釋して、今の世にも行はれておる。また窺基法師は、玄奘三藏の高弟であるが、他所へ行かるゝ時は、必ず車を三輛づゝ引かれた、第一車には佛像經論を積み第二車には酒肴を積み、第三車には妻を乘せて愛せられた、故に世人稱して三車法師と云つたは、この人のことである。其他肉食妻帶について云へば、數多く有るであろうが、もう是位で澤山であろう要するに前來の人々、之を以て未だ一宗一派を形成せずとは云へ、肉食妻帶を爲られたは事實である。然れども深く之を咎むるに及ばぬ、要は轉迷開悟出離得脱に有るのである、魚鳥等の肉を食せるがために、衆生に緣を結び、妻子を携ふるがために、より多くの人が菩提の道に入ることを得ば、肉食妻帶は寧ろ嘉すべきにあらずや。されば楞嚴經の第六卷には、諸菩薩や阿羅漢に對して、末世に及んで、衆生化益のためには、妻子を貯へてなりと、勸めよと、御說なされてある、味ふべき御言葉では有りませぬか。いま祖師聖人の肉食妻帶は、先例もあつて人も左樣であるから、我も斯樣であると云やうな、人眞似の御心ではない、他門他宗の祖師達の如く、淸僧となつて往生しては、在家往生の先達がない、泥の中に沈んでおる者を助けるには、我身も共に泥に染ねばならぬに由つて、御身も同じく肉食妻帶の泥の中へ飛込せられたのである、茲が出家發心の形を本こせず、捨家棄慾の姿を標せず、たゞ一念歸命の他力の信心を決

定せしむるときは、更に男女老少在家出家を撰ばぬ意で、宗教の妙味は實に茲に存するのである。傳教空海は如何にも高し、然れども其流を汲む末派や在家の者は肉食妻帶にして、師匠は師匠弟子は弟子、共に一味の佛果は期し難し、之に就いても、我々淨土眞宗に流を汲者は、深く喜ばねば成らぬことゝ存じております。

今かれら山法師や奈良法師などは、斯る事實を知らざりしか、又知ること雖、痛痒を感ぜざるが故に、論外に置きしものか、开は兎もあれ、淨土門の繁昌は、自宗の衰亡かつ大なる打撃なるが故に、嫉妬の心から迫害攻撃を、これ事ごとしたのである。然らば彼等は何處までも清僧で、淨土門の人々を彈劾する丈の資格あるか、また肉食妻帶に似寄の事も無いかと調べて見ると、決して然らずである。彼等の多くは大黒といふ妻君を持つておる、槃若湯といふ酒を呑んでおることは、昔から公然の秘密となつておるのである、諸君、實質は同じことでも名さへ變つておれば、可いといふ道理が何處にありませうか。或人が禁酒しておきながら、大茶椀で酒を呑んでおる、そこで他の一人が問ふた、君は禁酒したといふことで有つたが、今酒を呑んでおるは如何なる譯であるかと、ところが酒を呑んでおる人の答が面白い、怪しみ玉ふな、茶椀の上には箸がおいてある、橋(箸)の下を流るゝものは、酒にあらずして水であると云つたと云噺がある、いま彼等法師原の所行は、之と類似しておるものでは有るまいか、然るに婪妻を持つた者には御構いなく、妻を持つた者は流罪にせられ、肉を食つた者は死罪に處せられ、槃若湯を呑んだ者は天

下を横行しておるといふ道理は、この世界には無い筈である、併ながら之が世の有様で、不正義者でも勢いに乘じ多數を恃みて正義者を壓倒するのである。丁度何國かの議會において、多數黨が不正をなすべく、正義の少數黨を蹂躙するやうなものである。去ごこの壓迫この蹂躙を受けて、正義者は如何なる態度に出るか、又その心持如何を見て取り、吾人は开が果して大豪傑なるか、大偉人なるか、又は通常の人間であるかを知るのであります。

聖人は人格　通常の人は、物がトン〳〵拍子に能く行くこと、手の舞足の蹈處を忘れて喜ぶが、其代り一寸ヒザリ前になること、あ頭痛鉢巻憂鬱煩悶、狂氣こなつて大變である、天を怨み人を咎め丸で常識を失つて仕舞ものである。俊寛僧都は鬼界が島に流されて

遂に憤死した人であるが、彼は自己の運命を覺らずして、世を怨み時を怨み平家を怨んだではないか、而も自分は曾て平氏討滅に加擔した一人である、されば密議が漏れて、流滴せられたは、又止むを得ぬ次第と云はねばならぬ。今より二千三百餘年前、希臘に出たる大哲學者ソクラテスは、寃罪によつて獄に入るや、偶ま國難ありて、死刑の實行を延期すること三十餘日、或人この期を利用して逃亡を忠告せしと雖、我死すとも國法を犯さずして肯ぜず、遂に弟子悲慘の中に、自ら毒殺を甘じて受けた、而も其獄にある間、絶にず從容自若として弟子に道を敎へた、と云ふに至つては、如何にも敬暴すべき人格と申さねばならぬ。武田の軍勢天目山に破れ、四郎勝頼の首、織田信長の陣に至るや、信長罵つて曰く、咄豎子、乃公をして

枕を高うするを得ざらしめし者茲に數年、今果して何の樣ぞや、こ次いで德川家康の陣に至るや、家康胡床を下り禮を加へて曰く、公五州の主將を以て、今こゝに至る、豈に命ならずや、こ、噫、家康の天下を得る、信長の天下を失ふ、共に其修養の如何に由ることを見るべきにあらずや。「鳴ずんば殺して仕まへ時鳥」こは信長の人格を現はすもの、「鳴ずんば鳴せて聞かん時鳥」こは、秀吉の人格を現はすもの、「鳴ずんば鳴こき聞かん時鳥」こは、家康の人格を現はすものである。諸君宜しく内外の歷史を繙け、時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、吾人の修養に資する者、それ甚だ多きにあらずや。

今淨土眞宗の開山、親鸞聖人の如きは、惡僧原の讒訴によつて、流罪に御逢なされたけれども、決して天を怨み人を尤めるこ云樣子は、見るなかつた、反つて越後に流されたを、御喜びなされた、之は何によつて出來るかこ云へば、自己の信仰が鞏固なるからである言を換へて云へば、修養の圓滿に基くのである、配所に赴き玉ふ御心持を伺へば「抑又、大師聖人空源もし流刑に處せられたまはずば、我又配所におもむかんや、もしわれ配所におもむかずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是なを師教の恩致なり」こある、こんなことが如何して云へるだろう、逆境に立ち逆緣に逢うて、戰々競々せぬは、實に一大偉人でなくては、出來ぬことである、吾人は深く祖師聖人に學はねばならぬ。然らば聖人は何國までも、溫和しい優しい計りで、何ひとつ立派な仕事もせぬ、議論も何もせずに、横

に向ておれと云へば、三年でも横に向ておると云樣な御方かと云へば、左樣でも無いやうである。私の眼には、聖人は、處女脫兎的人格を供へて居られた御方の樣に見ゑます、平生は温和しい深窓に育つた御姫樣のごとく、聲も高くは仰せられず、謙讓の美、温良の德を具へては居らるゝが、正歟の時、破邪顯正を爲ねばならぬ場合、自己の大主義を貫徹するに當りては、水火の中をも、辭せぬといふ大勇氣を持つておらるゝ、謂ゆる或時は處女の如く、或時は脫兎の如き御方では無かつたろうかと存じます、でなければ、法然上人の門下において、三百八十餘人を相手に、信心諍論や信行兩座を分つやうな、大議論は出來なかろうと思はれます。

身業說法

私は、先には聖人を宗敎界の革命者と申しましたが、他の一面から見れば、聖人は又大德者と云はねばならぬ。彼の辨圓濟度の如き、辨圓は大なる惡鬼であるが、稻田の草庵に聖人を見奉るなり、害心忽ち止んで、頭巾を脫ぎ、刀杖を捨て、柿の衣を打遣つて、聖人の弟子と成れるものは、聖人が大德者であつて、其德が顏や姿に顯はれておるから、法話も說敎も成らぬ先に、人をして改悔慚愧せしむることが出來るのである、謂ゆる之が身業說法で法を說くことは、口先ばかりではない、姿形でも說法は出來るので聖人の如きは、口と姿と兩方で、說法なされたものと見ゑます。懷中の溫い人は、顏も福々しておる、內に德ある人は、何となく其德が顏に表はれる、私は東京におるとき、巢鴨の監獄を參觀した、那覇におるとき、沖繩監獄を見に行きましたが、千も二千も居る罪人

の顔を見ると、大抵嶮惡の顔色を爲ておる、內に德なくて惡ばかりあるからである、之を以ても、人間は心を修養せねばならぬことゝ存じます。

聖人の滅後は如何

已上は祖師聖人御在世の事跡について、ザッと御噺したのでありますが、聖人の滅後は如何と云ふに、今や我淨土眞宗は、內は本州四國九州は勿論、北海道でも千島樺太でも、琉球臺灣の末に至るまで、南無阿彌陀佛の六字の聲は、響かぬ處もなく、寺院教場のなき國は一國として有りませぬ、外は清韓を始こし、布哇亞米利加に至るまで、阿彌陀佛の尊號を傳へ、殊に近來正信偈御文の英譯ありてより、何れの國民も、眞宗の骨髓を味ふに至つた、寔に盛大御繁昌と云はねばならぬ、祖師親鸞聖人の卓見は、遠く今日を見貫せられたので、吾人は唯敬服するの外は有りませぬ。今試に最近の統計に據る、日本佛教各宗の寺院數を擧げて、之が勢力消長の跡を尋ねて見ると

法相宗	四十五個寺
華嚴宗	二十一個寺
天台宗	四千八百個寺
眞言宗	一萬二千七百六十二個寺
淨土宗	八千三百二十三個寺
臨濟宗	六千百三十個寺
曹洞宗	一萬四千〇九十九個寺

黄蘗宗　六百〇五個寺
眞宗　一萬九千百八十六個寺
日蓮宗　五千〇六十一個寺
時宗　五百二十一個寺
融通念佛宗　三百五十七個寺
計　七萬一千九百十個寺

であるが、諸君統計の示すところは以上の如し、嗚呼、當時惡口雜言を加へたる、山法師寺法師もしくは奈良法師は、今如何の狀態そや、諸君、足を一度京都に運び、杖を叡山や春日野に曳いて見られよ、比叡の山風は激しく吹き、三井の晩鐘は又悲哀に聞こゆる有るではありませぬか、三笠山の月、猿澤の水、今も昔に變りはなけれども、東大興福の現狀それ如何、訪客をして轉た今昔の憾あらしむるでは無いか。人は云ふ六條の天に妖雲ありと、然れども我之を知らず、見よ堂々たる兩堂は東西の六條に聳ゑ、英明なる法主は上にあり、下には内外に渉れる學者綺羅星の如し、寔に日本佛教の中心、活動の源泉たり、抑も是れ何に由つて然るか、聖親鸞の遺德にあらずや。

諸君、弘長二年は、今歳明治三十九年を去ること六百四十五年前である、すなはち六百四十五年前において、我等の祖師親鸞聖人は娑婆化緣の薪つきて、本國淨土に御歸りなされた、然れども御心は今に此の世界に、御止めなされてある、廣文類略文類を初め、多くの御消息御和讃の如き、その他漢和の御聖教、皆これ祖師聖人の御

心である、我等は其心を忘れては濟まぬ次第であります。

「木像物云ハザレバ、自ラ佛教ヲ述ベズ。經典口ナケレバ、手ヅカラ法門ヲ說クコトナシ」。聖人の御紀念は殘つてあつても、夫を頂く者、夫を味ふ者が無かつたならば、何の役にも立たぬ、今よりも益す盛大ならしむるは「遺弟ノ念力ニ由ル」のである、他人の門は、我家の庭を掃除てから後のことである、我身が眞宗信徒として、我身が祖師聖人の遺弟として、恥ないやうになつてから、夫から他人の身の上に及ぶべきでは有るまいか。

噫、親鸞聖人　淨土眞宗の祖師、親鸞聖人見眞大師と云へば、一大偉人として知らぬ者は殆ごない、南無阿彌陀佛の六字の聲は、日本國中津々浦々に至るまで、響き渡らぬ處はないのである。吾人は

此の一大偉人祖師聖人の遺したまひたる德音を、諸君と共に長く守らねばならぬと同時に、增々發展せしめねばならぬ大責任を、有しておる者である。聊か祖師聖人の聖日に當り、所感を述べた次第であります。

爰、依祖師聖人之化導、聽法藏因位之本誓、歡喜滿胸渴仰銘肝、然則、報而可報大悲之佛恩、謝而可謝師長之遺德　覺師

如來大悲ノ恩德ハ、身ヲ粉ニシテモ報ズベシ、師主知識ノ恩德モ、ホヂヲクダキテモ謝スベシ。

正像末和讚

佛恩之高大、宛超于迷盧八萬之巔、師德之深廣、殆過于蒼溟三千之底。

改邪鈔

或こしの御正忌に、寒さ甚しく、雪いとおほく
ふりげるをり、よみける

墨染の袂にかゝるしら雪も昔しのぶのよすがなりけり　槐庵

見眞大師　普翠園荷風

近道を　をしへに出たり　花の主

辭世

嗚呼樂し　住變る世の　月の旅

詠史　古竹庵梅陽

石にふし　雪にねむりて　今日の花
春の句のなかに

菜の花や　今日も急がぬ　一人旅

故稻田近義氏は初め嘉一郎隱居して後近義と云ふ安藝國木野村に於ける素封家にして學深く藝として通ぜざるなし中にも歌詩殊に發句は其長ずる處晩年に及び立机して普翠園荷風と號し只風月を友とす明治三十九年十月二十一日七十九歳を一期として亡き人の數に入り玉ふ實に予が大なる恩人なり噫恩人今や亡し吁

古竹庵梅陽は姓を廣幡と云ひ名を知三と云ふ實に予が嚴父なり予をして今日ある陰に陽に其受恩の廣大なることは云はずもがな今年六十七歳嗚呼嬉しい哉今猶鑼鑠たり矣　廣幡慶人附記

二種の深信について

（明治四十年二月十五日於日向國小林教場説教）

自身ハ現ニ是レ罪悪生死ノ凡夫、曠劫ヨリ已來、常ニ沒シ常ニ流轉シテ、出離ノ縁アルコトナシト深信セヨ。彼ノ阿彌陀佛ノ四十八願ハ、衆生ヲ攝取シテ、疑ヒモナク慮リモナク、彼ノ願力ニ乘ズレバ、定テ往生ヲ得ト深信セヨ。

只今讃題に具へた御文は、善導大師の散善義四枚目にある御言で二種深信といふて世にも名高い御文である。大体善導大師は、觀無量壽經の疏を御作りなされて、玄義分、序分義、定善義、散善義といふ四帖の疏を御製作、乃ち散善義は其中の一つである。そこで觀經の中の十六觀の下三觀を、御講釋なされたが散善義で、三心の中の第二の深心を釋するに「深心ト言フハ即チ是レ深ク信ズルノ心ナリ」とおいて、その下に機の深信と法の深信との二つを、御立てなされたものぢや、此の二種深信を一口に心易く云へば、元祖法然上人の仰せの如く「始ニハ我身ノ程ヲ信ジ、後ニハ佛ノ願ヲ信ズル也」とあつて、我身のツマラヌことが知らるゝなり、尊い本願の不思議が信ぜらるゝ樣になるこの仰せである。併し此の、身の程を信ずるといふこと、我身の分際を知るといふことが、甚だ難いことである

「或時、ハーバート、スペンサー先生のこころに一人の男が參り、先生は世界一番の大學者であれば、世の中のこと宇宙のことは、何でも分らぬことは、ありますまいと問ふたれば、先生は莞爾と笑はれ、まあ〳〵私について來いとて、倫敦の市中を流れておる、テエ

ムス河に連れて行き、片手に砂を一ぱい握り、まあこんなものである、私が知つておるこころのものは手にある砂の數ほどであるが、知らぬこころのものは、この河の砂の數ほどあるわい」と、云はれたこいふことである。誰の身の上でもであるが、併し、ツマラヌ者ほど、我身の價値に氣がつかぬものである。いま眞宗の門に入るには、我身の分際を知るといふことが、先づなければならぬ、今席は此の二種深信についてゆるりと、御噺する考である。

さて二種深信のことは、善導大師の上において二個所あるので、も一個所は、往生禮讃の二枚目にもあるのであるが、今は六要鈔の意によつて御噺する考である。自身は現に是れこある此の自身と云ふ二字が眼目である、他人のことを云ふのではない、我身の上であるぞ、我身のことであるから、知らぬ他人のことゝ思うて油斷してはならぬぞこの仰せ、現在目で見る通り、一年三百六十五日、心で思ふこと口で云ふこと身で行ふこと、みな起惡造罪で、六道輪回の仕事ばかりをしておるのである、善心屢退き惡法屢起るで、タマサカ善事をするかと思へば、水に畫ける繪の如し、かく下から消ゑて行つて、惡いことは起り通しぢや、それが今日初ての事かといへば昨日や今日に初つたのぢやない、曠劫已來常沒常流轉するとあつて久遠劫の昔から此の通りぢやとあるのである、それで出離の緣あることなしと深信せよとの御勸めぢや。然るに彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝取して無疑無慮と、疑ひもなく慮りもなく、彼の願力に乘じて定で往生を得と深信せよと、本願を信ずる法の深信の有

様を御示しなされた。

「有善無善ヲ論ゼズ、自ノ功ヲ假ラズ、出離偏ヘニ他力ニアリ」

こあつて、功德があろうが善根があろうが、夫をもつて役に立てるのぢやない、廻向するのでもなければ、手柄にするのでもない、又罪は五逆も十惡も、五障三從の徒ら者でも、其機を歎くぢやない、出離ひこへに他力にあり、我機の方を眺めて見りや、色々樣々であるが、それを矯して行くのぢやない、往生ほどの一大事を、凡夫の計ふべきにあらず、此度の往生は一から十まで如來の御計ひこ、唯本願他力の御不思議を信ずるより外はないのぢや、これ元祖法然上人の「愚痴ニカヘリテ、念佛シテ淨土ニ生ル」こ、のたまふこころぢや。

「聖道ノ諸教ハ、盛ニ生佛一如ノ理ヲ談ジ、今教ハ自力無功ト知ルニ依リテ、偏ニ佛力ニ歸ス」こあつて、聖道門に於ては、釋迦何人ぞ我何人ぞ、父母所生身速證大覺位などこ云つて、佛も衆生も同じことである、一如であるこ云ふ見識で、コツコツこ、功德をつみ善根を求めて、四諦こか十二因緣こか、六度の行こか云ふものを立てゝ、漸々修學悉到成佛こ、ボツボツ修行して行くけれども、併し思うて見れば「日暮レテ道遠シ」こいふ有樣である、然るに淨土眞宗の教は左樣ではない「善モホシカラズ惡モ恐レナシ」こあつて、功德を修して來い、善根を植ゑて來い、手土産を持つて來いよこ、仰せなされたことは、一度もない。罪は如何程あろうこも、障はどれほどあろうこまつよ、在家出家の隔てもなく、男子女人の區別も

なく、智者も來い愚者も來い、如何なる者でも五乘齊入、十方衆生を悉く助けるとあるが彌陀の本願、それでも私は五障三從の淺ましい女人の身なればと逃げんとすれば、そんな者もあろうかと、豫て第三十五の願に、女人成佛と別に女人ばかりのために、本願を立ておいたこの仰せである、之が自力無功といふことを合點せねばならぬ。蓮如上人の上から伺へば

モロ〳〵ノ雜行雜修、自力ノコヽロヲフリステヽ、一心ニ阿彌陀如來、ワレラガ今度ノ一大事ノ後生、オンタスケサフラヘトタノミマフシテサフラフ。タノム一念ノトキ、往生ハ一定、オンタスケハ治定トゾンジ、ヨロコビマフシサフラフ。

とある、之が自力の功なきを知つて、有りとあらゆるものを悉く皆捨てゝ、如來の本願に縋る姿で、今の自力無功と知るによつて、偏に佛力に歸するとあるのと、同じ心である。

この二種深信を御文の上に移して見ると

當流ノ安心ノオモムキヲクハシクシラントオモハンヒトハアナガチニ智慧才覺モイラズ、タヾワガ身ハツミフカキアサマシキモノナリトオモヒトリテ、カヽル機マデモタスケタマヘルホトケハ、阿彌陀如來バカリナリトシリテ、ナニノヤウモナク、ヒトスヂニ、コノ阿彌陀ホトケノ御袖ニヒシトスガリマイラスルオモヒヲナシテ、後生ヲタスケタマヘトタノミマウセバ、コノ阿彌陀如來ハフカクヨロコビマ

シ〳〵テ、ソノ御身ヨリ八萬四千ノオホキナル光明ヲハナチテ、ソノ光明ソナカニ、ソノ人ヲオサメイレテオキタマフベシ。

とある。また御和讃に引上げて伺へば

煩惱具足ト信知シテ　本願力ニ乘ズレバ
スナハチ穢身ステハテヽ　法性常樂證セシム

とある。まことに一口に御知らせ下され、煩惱具足の凡夫と機を信ずるによつて、無手と本願他力の不思議を信ずるなり、娑婆の縁きれ死ぬるなり、極樂淨土の蓮臺で、光明輝く佛にして頂くことちや。之が二種深信の大略であるが。併し二つ信心があるではない、機を信ずれば法を信ずる樣になり、法を信ずれば機を信ずる樣になるので、直に一つとなるのである。これ卽ち法在一念說必次第也と云ふべきものである。ちと又外の噺でもよかろうか、昔支那に陽子といふ先生があつて、四五人の弟子をつれて、宋といふ國へ旅行をせられ、或宿屋に泊つたところが、その宿屋に二人の女房がおる、一人は美人で他の一人は容色が醜い、然るに醜婦の方が貴れて美人の方が賤れておる、そこで陽子が宿屋の亭主に其譯を尋ねられたれば、亭主の答に、美人の方は、私の妾でございますが、彼は其美を鼻にかけて、此の家におらずごも、何へでも行けると思うて、萬事につけ、私をふみつけておりまする、故に只御客を引く丈に、店においてございますが、今一人の容色の惡い方は私の本妻、彼は自分の樣な容色の惡い、ツマラヌ者でも、此家の主人なればこそ、愛して

置いてくれるこゝ心の底から私を大事にして呉れますので、私は其美を美こせず、其醜を醜こせず、本妻の方を愛しておる次第でございますこ答へた、そこで陽子は門人を顧みて、弟子之を記せよ、行賢にして自ら賢こする行を去つたならば、安くに行きても愛せらるゝであろうこ云つたこ云ふことが、莊子の四卷目に載てある。

下るほご其名は高し藤の花

で、學ある者は學に誇らず、美人は美に誇らず、藝ある者は藝に誇らずして、その身を低きにおかば、必ず愛せらるゝであろう、矧んや未來一大事の前においては、曾無一善の我身の上、恥しながら御目にかけるものこては一つもない。

茲において難を入れて見るなれば、機の深信についての疑で、機

の深信は聖者にも通ずるか如何であるかこの問題である、なるほご我々は曾て一善もない一生造惡の徒ら者なれば、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫こ云つても聞るるが、彼の龍樹菩薩は歡喜地の菩薩樣であるし、天親菩薩は十向滿位の聖者である、夫をも罪惡生死の凡夫こは云へまいこのことである、併しまだ之は淨土門の綱格を知らぬからぢや。喩へば彼の風呂に入るを見よ、湯にはいるこきは、謂ゆる「大名も乞食もおなじ風呂の中」で、男も女も位の高い人も低い人も、皆悉く丸はだかになるではないか、綾や錦の小袖も、立派な洋服も、ツマラヌ襤褸も皆ぬぎすてゝ入る樣なものぢや、故に龍天の二菩薩も我等こかはらぬ一心の御領解、源信和尚は「余ガ如キ頑魯ノ者豈ニ敢テセン哉」この玉ひ、當時智慧第一の法然こまで歌

はれた御方でも「十惡ノ法然」と自ら名乘らせられた、また御開山聖人は、一生涯「愚禿々々」と名乘たまひ、中興蓮如上人は「愚衲」と云ひ「愚老」と名乘なされた、然れば今日の我々も、我身は惡き徒ら者と過り果て、斯る奴まで御助けとは、親樣なればこそと深く信じた一念に、聖者の仲間入をさせて頂くこと故、凡夫も聖者も同じ安心とは此の味である。

又なかには法の深信も他力の御指圖、機の深信も佛智の御知らせと、何も角も他力々々と云ふのは、合點の行かぬことぢや、參りたければ我足で參り、聞きたければ我耳で聞き、稱へたければ我口で稱へる、夫に他力と云ふのは分らぬと云人もあるが、之は一應の機と云ふものぢや、夫は丁度、舟は艪櫂の力ばかりで運べると思ふの

で、水の力を忘れておるのぢや、淮南子のなかに「越船蜀挺不能無水而浮」とあるが、實に其通りぢや。若も舟は艪櫂の力ばかりで行くものならば、その舟を陸地にあげて、艪櫂を使うて見るがよい、どれほど艪櫂を上手に使うても、陸地で舟は運ぶことは出來ぬ、然れば舟の往來は、往來ともに水の力と云はねばならぬ、艪櫂の働きも水の上にあるからぢや、水の力を離れては、舟も艪櫂も埒のあくことではない、如何にも我心で信じ、我足で參り我耳で聞き、我口で稱へるに違ひはないけれども、夫は艪櫂で舟を動かすごとく、大悲弘誓の水の上に浮べられておる故に、この働きも出來るのぢや、大悲の水を離れては、一寸も御法の勤めが出來るものではない故、心得違ひをしてはならぬ、去れば茲處の味いを、安心決定鈔のなか

には

願行ミナ佛體ヨリ成ズルユヘニ、拜ム手、唱フル口、信ズル心、ミナ他力也。

と仰せられた。

如此聽聞なられた上からは、いよ〳〵未來の一大事に、安心安堵と夜があけて、今死んでも往生一つは間違ないといふ身の上と成り「其ノ人間ノ有樣ニマカセテ、世ヲスゴスベキコト、肝要ナリ」とあれば、進んでは君に忠、親に孝、夫婦兄弟なかむつまじく、人に對しては信の道を忘れぬやう、退いては我身〳〵受持の仕事を怠らぬやう、念佛諸共日暮しせらるゝが、何よりもつて肝要である、先。

願力無窮ニマシマセバ、罪業深重モオモカラズ、佛智無邊ニマシマセバ、散亂放逸モステラレズ。　正像末和讃

如來ノ作願ヲタヅヌレバ、苦惱ノ有情ヲステズシテ、廻向ヲ首トシタマヒテ、大悲心ヲハ成就セリ。　同　讃

ワガコヽロニマカセズシテ　コヽロヲセメヨ。佛法ハコヽロノツマルモノカトオモヘバ、信心ニ御ナグサミ候。蓮　師

タヾ男女善惡ノ凡夫ヲハタラカサヌ本形ニテ、本願ノ不思議ヲ以テムマルベカラザルモノヲムマレツセタレバコソ、超世ノ願トモナヅケ、横超ノ直道トモキコヘハンベレ。　口傳鈔

白骨の御文について（明治四十二年七月十五日於安慈國大竹善福寺竹追吊會説教）

サレバ人間ノハカナキ事ハ、老少不定ノサカヒナレバ、タレノ人モ、ハヤク後生ノ一大事ヲ心ニカケテ、阿彌陀佛ヲフカクタノミマイラセテ、念佛マウスベキモノナリ。

鳥邊山昨日も今日も烟たつ

ながめて通る人はいつまで

鳥邊山とは、京都西大谷の裏山で墓の澤山ある處を云のである、昔は茲處で人を燒いて居たものと見る、その鳥邊山を見渡せば、昨日も今日も人を燒く烟が立登つておるが、之を他事のやうに眺めて通行しておる人は、いつまでの命であろうか、その眺めて通る人

も、百年も千年も生きる者はないので、今日は人の身の上明日は我身の上、やれ〳〵儚ない無常の世の中ではあるわいと、世の無常を詠んだ歌の意。

さて只今讃題に具へた御文は、かねて聽聞の如く、世にも名高い白骨の御文の一節である、蓮如上人我等に世の無常を示さんとて、御文五帖目第十六通に御示しおき下された、全體この白骨の御文は恐れ多くも　御鳥羽の院樣が、隱岐國の行宮に御出遊ばされたときに世の無常を觀じ遊ばされて、御作りなされたのが無常講式で、その無常講式の御詞を、存覺上人御引なされた、その存覺法語より蓮如上人は御文に御引なされたものである、眞に恐れ多きことなれども一天萬乘の君樣でも、都を離れて遠島に御隱れ遊ばす時もある、今

その勅藻を伺ひ見るに

アルヒハ、キノフスデニウヅンデ、ナミダヲツカノモトニノゴフモノ。アルヒハ、コヨヒオクラントシテ、ワカレヲ棺ノマヘニ、ナクヒトアリ。オホヨソハカナキモノハ、ヒトノ始中終、マボロシノゴトクナルハ、一期ノスグルホドナリ。三界無常ナリ。イニシヘヨリ、イマダ萬歳ノ人身アルコトヲキカズ、一生スギヤスシ、イマニイタリテ、タレカ百年ノ形體ヲタモツベキヤ、我ヤサキ人ヤサキ、ケフトモシラズアストモシラズ、オクレサキダツヒト、モトノシヅクスエノツユヨリモ、シゲシトイヘリ。

こあるが、之が無常の有樣である。この無常ばかりは、誰でも免れることは出來ぬ

上ハ大聖世尊ヨリハジメテ、下ハ惡逆ノ提婆ニイタルマデノガレガタキハ無常ナリ。

こあつて、釋迦牟尼如來も涅槃の雲に御隱れなされ、提婆の惡人も無常には打勝つことは出來なんだ、されば善人でも惡人でも、高いも低いも男も女も、生きこし生ける者、誰でも彼でも、遁るゝことの出來ぬが此の無常なれば、後悔をせぬやう狼狽ぬやうに、平生に心がけねばならぬことぢや、この御文を初から伺うて見れば、寔に骨身に染み込やうである、私は、後生心の薄い人や、慳貪邪見に日暮しをする人に、別して此の御文の熟讀を、勸めおく者である

夫人間ノ浮生ナル相ヲツラ〳〵觀ズルニ、オホヨソハカナ

キモノハ、コノ世ノ始中終マボロシノゴトクナル一期ナリ
サレバイマダ萬歳ノ人身ヲウケタリトイフ事ヲキカズ、一
生スギヤスシ、イマニイタリテタレカ百年ノ形體ヲタモツ
ベキヤ、我ヤサキ人ヤサキ、ケフトモシラズアストモシラ
ズ、ヲクレサキダツ人ハ、モトノシヅク、スエノ露ヨリモシ
ゲシトイヘリ。サレバ朝ニハ紅顔アリテ夕ニハ白骨トナレ
ル身ナリ、スデニ無常ノ風キタリヌレバ、スナハチフタツ
ノマナコタチマチニトヂ、ヒトツノイキナガクタエヌレバ
紅顔ムナシク變ジテ桃李ノヨソホヒヲウシナヒヌルトキハ
六親眷屬アツマリテ、ナゲキカナシメドモ、更ニソノ甲斐
アルベカラズ、サテシモアルベキ事ナラヲバトテ、野外ニ

オクリテ夜半ノケムリトナシハテヌレバ、タヾ白骨ノミゾ
ノコレリ、アハレトイフモ中〳〵ヲロカナリ、サレバ人間ノ
ハカナキ事ハ、老少不定ノサカヒナレバ、タレノ人モハヤ
ク後生ノ一大事ヲ心ニカケテ、阿彌陀佛ヲフカクタノミマ
イヲセテ、念佛マウスベキモノナリ。
こある、後に殘る者は白骨ばかりぢやが、其時に後悔しても間に
は合はぬぞへ、金はドレ丈あつても、未來へ持つて行くことは出來
ぬ、我身について離れぬものは、造りこ作つた惡業煩惱ばかりぢや
元祖法然上人は
夫レ朝ニ開ケル榮花ハ、夕ノ風ニ散ヤスク、夕ニ結ブ命露
ハ、朝ノ日ニ消ヤスシ、是ヲ知ラズシテ、常ニサカエン事

ヲ思ヒ、是ヲ解ラズシテ、常ニ有ン事ヲ思フ、然ル間無常ノ風一度吹テ、有爲ノ露永ク消ヌレバ、此ヲ曠野ニ捨テ、此ヲ遠山ニ送ル、骸ハ遂ニ苔ノ下ニ埋レ、神ハ獨リ旅ノ空ニ迷フ、妻子眷屬ハ家ニアレドモ伴ハズ、七珍萬寶ハ庫ニミテレドモ益モナシ、只身ニ隨フ者ハ、後悔ノ涙ナリ。

と仰せられたが、後悔を爲ぬやうに爲にやならぬ、妻子眷屬は、故郷に泣いて居ても道連にはならぬ、七珍萬寶は、庫に一杯あつても捨てゝ行かねばならぬ「獨生獨死獨去獨來」唯一人來て一人歸らねばならぬが、その用意は出來て居るか。

博覽會見物のために大阪に上るとか、また京參りをするとか云へば、二日も三日も前から、その用意や支度をする、之は僅か五日か十日の旅であるのに用意をするが、未來の旅は長いことちやが、その支度は出來ておるかの、死ぬると云こと丈は、十人が十人百人が百人、いか程達者な生れ質でも、どれ丈力の強い人でも、何れ一度は死なねばならぬと云ふことは、生れた時からチヤンと定つておることちやが、後悔せぬ丈の用意はあるか、慈鎭和尙は

皆人の知り顏にして知らぬかな

かならず死ぬるならひありとは

と、詠み殘されたが其通りで、死ぬることは、人の事ばかりのやうに思うておるが間違ひちや「往事眇茫として總て夢に似たり、舊友零落して半泉に歸す」で、指折り數へて見れば、むかし竹葉の友であつた者は、大方亡き人の數に入つておる、今も分らぬ我身の上

思へば〳〵危ないことよ、私も昨年冬から今年春にかけて、二人の弟を亡くしました、上は二十七歳で次は二十四歳、それ以來大に力が落ちました、忘れも致しませぬが、四月十五日の朝、父上が私の寢所に來られ、多聞の樣子が變つた樣であるこの仰せ故、行つて見れば、まだ〳〵慥かで話も出來る、何でも今一度回復させて遣りたいと、父子相談して、私は縣病院の齋藤院長を御迎に、十時の瀧車で廣島に行つた、そして齋藤院長と話をしておるところへ

タモンシンダ

この電信が宅から來た、私は此の電信を受取て、病院を出て歸る時のことを思ひ出すと、實に〳〵涙の種で、筆にも口にも盡すことは出來ませぬが、思へば丸で夢のやうでありまする、爾來私は物事を捨ておかず、早く運ぶやうに成りましたが、凡て人間は、我身に引受て無常を觀せねば駄目でありまする。唐の白樂天は

昨日南隣ニ哭スル聲、一ニ何ゾ苦シキヤ、コレ妻夫ヲ哭ス
夫年二十五。今朝北里ニ哭スル聲、一ニ何ゾ切ナルヤ、コレ母兒ヲ哭ス、兒年十七八。四隣皆如此、天下夭折多シ

と、歌つておるが、實に人間境界の有樣は、この通りである。

有明の行燈に油が切れると、其儘直に火が消える、その時初て燈火の命が盡きたやうに思へども、點しつけた其時から、次第〳〵に油の減り行く處が、その燈火の命の縮るのぢや、之を經には念々壞滅と說せられた、卽ち時間の經つに從つて、段々油の減り行く處が刹那の無常で、トント火の消ゑたところが、一期の無常と申すもの

ちや。

我々人間こても其通り、生れ出でた其日から、一日暮せば一日の命が減り、一月たてば一月丈、一年たてば一年丈の壽命が縮る。いかに何れも同行中、その有明の行燈も、首尾よう油がつきてから、消ゆるものに極つておれば善いけれども、無常の娑婆の果敢なさには、思はぬ風に吹きけされ、飛んで火に入る夏蟲のために打消るゝこともある、今日の我等も、定命かぎりの油がつきて、死んで行くものに極つておれば善けれども、思はぬ無常の風に消され、頓死頓病するもある、水に溺れ火に燒れ、吹雪に倒れ木から落ち、毒に中るもある習い、何時どうして死ぬるやら、程の知れぬが我等が身の上、死んでからは、悔んでも歎いても後へかへらぬ事であろう。茲

の道理を覺悟して、平生業成の御領解を得て、何時いかなる緣にあうて、敢なく命は終ることも、臨終の夕に狼狽へぬやう、無事な内に彌陀を賴み、達者な内に極樂を願うて、安心安堵こ落ついて、今死んでも淨土參りこ、露塵ほども疑はぬやう危まぬやう、茲處が何よりの肝要である、それで只今の御文には「サレバ人間ノハカナキ事ハ、老少不定ノサカヒナレバ、タレノ人モ、ハヤク後生ノ一大事ヲ心ニカケテ、阿彌陀佛ヲフカクタノミマイラセテ、念佛マウスベキモノナリ」こ、仰せなされた。

人生僅か五十年、七十は古來稀なりこ、昔の人は申しておりますが、今も七十まで生きるこ、古稀の祝いをするのは、之がためである。由來東洋の學問の上では、人の定命は五十こ申しておる、處が

今日西洋の統計の上では、人の定命は三十六歳ごしてある、然るに之を世界中の、人の統計から云ふこ、三十二歳こなつておる、段々心細くなるではないか、それも出息入息不待命終こ聞いて見れば、寔に以て頼み少ない次第である。

釋尊は中天竺の淨飯大王の御子様であつたが、やはり此の無常の道理を觀じて、山に入つて御修行なされたのちや、こゝを大無量壽經には、見老病死、悟世非常、棄國財位、入山學道こ御說なされた老病死を見て世の無常を御悟りなされ、國をも捨て寶をも捨て、尊い皇太子の御位をも皆捨てゝ、檀德山に入つて佛道修行をなされた「生死事大無常迅速」無常の風の烈しいことが知られ、出て行く未來は一大事こ、心にかゝつたならば、皆その通りでなければならぬ由來人間には三個の大事がある、第一には生れるこ云ふことが一つの大事、生長して嫁を取り聟を取る、乃ち結婚は第二の大事、最後に死ぬるこ云ふこ未來の問題は、大事の中の大事ゆゑ、今も往生の一大事こ心をつけて下されたのである。然るに淨土眞宗に御流れを汲み、他力易行の御教を信ずる難有さには、家を捨てるに及ばず妻子を捨てるに及ばず、山に入つて修行をせよこも仰せられず

ダダアキナヒヲモシ奉公ヲモセヨ、獵スナドリヲモセヨ、
カカルアサマシキ罪業ニノミ、朝夕マドヒヌル我等ゴトキ
ノイタヅラモノヲ、タスケントチカヒマシマス、彌陀如來
ノ本願ニテマシマスゾト、フカク信ジテ

こある、我機の方を眺めて見やり、欲しい惜しい憎い可愛で、一

年三百六十五日、三毒の煩惱の絶間はない、能く〳〵考へて見れば地獄は一定わが住家ぞかし、修行は出來ず善根は積めず、智慧もなければ學問もなく、有るものは罪と障ばかりで、嫌でも應でも、元の三惡の古巣に歸らねばならぬ此の私を、泣くに及ばぬ歎くにや及ばぬ、五劫の思案も永劫の修行も、そんな者を助けるために爲ていたぞや、末代の凡夫罪業の我等たらん者、罪はいかほど深くとも我を一心にたのまん衆生をば、必ず救うべしと呼びかけて下さる其下に、さては斯る奴まで御助けとは、あら嬉しや有難やと、如來の仰せが眞受に成り、未來の大事に夜が明けたのが、歸る支度が出來たのぢや、旅立つ用意が整ふたのぢや、茲を「阿彌陀佛ヲフカクタノミマイラセテ、念佛マウスベキモノナリ」と、仰せられたもので

「念佛マウスベキモノナリ」とは、もはや信後相續の姿、報謝の念佛を御示しなされたものである。

兎角人間と云ふものは、淺ましいもので「喉許通レバ熱サ忘ル、」と云つた如く、親に分れ兄弟に離れ、可愛い妻子と分れた其時は、共に死にたいとまでも思ひ、世の無常も深く身に覺るらるゝが「去者ハ日々ニ疎シ」で、一年たち二年たちする内には、又もとの木阿彌となつて、無常の風は何處を吹くやら、忘れて仕舞のが凡夫の常ゆゑ、時々怠り易い我心に、鞭を加へねばならぬ。むかし叡山に仙命上人と云人があつた、浮世の名利を事とせず、性質も至つて無慾の人であつて、只深く後生菩提の道に心がけ、旦暮念佛三昧を業としておられたが、或とき寺に出入の者が來て、若し板があれば、二

三枚下されたいと云ふ、左樣か今あり合せの板こてはないが、是非入用なれば、床板を外して行けと、申された、されば不遠慮な男もあればあるもの、夫は忝ないこて、疊をあげ床板を二三枚取り外して、持つて歸つて仕舞つた。その後ある夜、東塔の覺尊上人と云人所用あつて、仙命上人を訪ひ居間へと通られたが、床板の外してあるこも知らず、足踏み外して落ち込んだこき、南無三かなしやこ云はれた、仙命上人それを聞て、之は〳〵出家に似合ぬ不覺の人かないつまで存命ある身こ思召すぞ、思ひがけなふ失足して死ぬるかこ思はゞ、南無阿彌陀佛ここそ唱へらるべきに、左はなくて、やれかなしやこは何事ぞ、さて〳〵不覺の至り哉こて、懇に教訓せられたこ云ふこが、鴨長明の發心集に載てある。誰にも彼にも、仙命上人

の如くせよこは云へぬが、其心がけ丈は學びたいこ思ふ。

併し斯の如く辯ずるこ、局外者は直に批難をする、佛教は厭世教である、眞宗は未來の事を敎へて今生の事を敎へぬ、世の爲にならぬこ申しますが、しかし之は一を知つて二を知らぬこ申さねばならぬ、淨土眞宗御開山の御敎へには、未來さへ助れば夫でよい、今生は如何でも善いこ敎へたここはない、佛敎さへ分れば、王法は如何でも善いこ云つたここはない、先德の御言にも

王法ハ額ニアテヨ、佛法ハ內心ニフカクタクワヘヨ。

こも仰せられ、又

後生ハ只今ノ思ヒナナセ、今生ハ百年ノハカリゴトヲ爲セヨ。

こも仰せられて、無常迅速の世の中であるから、往生は只今の思

ひをして心にかけよとは、安心門眞諦の教で心の落付場、未來旅出の用意は十分にしておいて、其のち人間の有樣に任せて世を過せよ百年も千年も生きておる考で、世渡りを爲せよとは、今生に對する俗諦の方を、敎へて下されたものぢや。

蓮如上人、あるとき老婆に向い、婆々よ念佛が唱へらるゝか、との御尋ねがあつた、其とき老婆の申上るには、ハイ糸を紡ぐ〳〵御念佛を申しておりますと、答へたれば、夫れは惡い、念佛を唱へながら糸を紡げよと、仰せられたとあるが、之が念佛行者の平生の心得ぢや。仕事ばかりを爲るのも間違ひ、念佛ばかりを唱へておるのも間違ひ、仕事もせず念佛をも唱へぬのは猶さら間違で、御念佛を唱へ〳〵、御慈悲の中から世渡りの仕事を爲るのが、最も一番に結構と云ふものである。

斯の如く聽聞の上からは、彌々老少不定と云ことを忘れぬ樣、未來の大事に夜があけて「死ナバ淨土ヘ參リナン、生キテハ念佛唱ヘナン」で、此の世におる間は、各自の職業を怠らぬ樣、人の人たる道を踏み外さぬ樣にして、ヨシ辛いことは有うとも「一世ニ困苦スト雖、須臾ノ間ナリ、後ニハ無量壽佛ノ國ニ生レテ、快樂極リナシ」とあれば、念佛諸共麗しく日送り爲らるゝが、何より以て肝要。

末代多聞が一週忌の逮夜によみける　槐庵

去年の今日ありし事ども語り出でて御名唱へつゝ更す夜半哉

明治三十六年十月、予、大隅國種子島に留錫の砌、身に所勞ありて、床に臥すこと六旬。その病苦の暇、つれ〴〵のあまり、大無量壽經をとりいだし、四十八願を歌題にして、佛德を讃歎したてまつりぬ。

ここし四十二年六月、予、また盲腸炎にかゝり、月餘くるしみしも、佛祖の冥祐により、幸に存生することを得たり。病後なにごともなしがたければ、かつて詠おきし因願の歌をとりいだし、いかゞこおもふ節を、さらに詠直して、喜びの色をふかめつ。

思ふに、世に歌よむ人は多かれど、佛敎にも通じたる宗匠は少なし、また佛學者は、すくなからねど、和歌の道をもかねたる法師はおほからずなむ。兎やせむかくこ思ひしに、予がむかし大學にあるの日、ふかく親しく敎をうけし嗣講赤松圓純先生こそ、其人ならめと心つきて、すなはち添削の勞を乞ひまつりき、これ願意深重にして、病餘の腰折、題意に違せんことを恐れてなり。聊かその由來を記すこと共に、同好の人々に示して、喜びを分んが爲「敎海餘滴」の附錄となし侍るになむ。

明治四十二年七月十五日

槐庵主人

廣幡慶人識

欲覺瞋覺害覺ヲ生ゼズ、欲想瞋想害想ヲ起サズ、色聲香味觸法ニ著セズ、忍力成就シテ、衆苦ヲ計ラズ、少欲知足ニシテ、染悲癡ナシ。

大無量壽經

己ヲ修メ體ヲ潔シ、心垢ヲ洗除シ、言行忠信アッテ、表裏相應ス。

同　經

我こいふ心しなくば世の中に鬼てふ物のいかであるべき　槐庵

四十八願歌

一、無三惡趣願
飢になきほむらにさけび相はみし昔のうさは夢にだに見ず

二、不更惡趣願
うかりける古里に又かへるべき道もこぢつる彌陀の御國か

三、悉皆金色願
彼國に生れてこそは親も子もおなじ黃金のほこけごはなれ

四、無有好醜願
よしあしこわくべくもなし難波江の水の上のかげ大空の月

五、宿命通願

いその上ふるき昔も今さらに知られてかなし又よろこばし

六、天眼通願

雲きりも霞も物か物みなのありのかぎりをつくしてぞ見る

七、天耳通願

千よろづのくにの佛のこく法をゐながらにして茲にきく哉

八、他心通願

しりあへる心のそこの濁らねば耻ぢて包まん煩らひもなし

九、神足通願

大空をかけるはやふさ早けれど彌陀の御國の人にやは及ぶ

十、漏盡通願

まよひてし闇もあけゆく朝風に心にかゝるちりものこさず

十一、必至滅度願

かの國に我をまつらむかならずこちぎりし誓たゑぬ限りは

十二、光明無量願

月影に日かげにまさる御光の照さぬかたはあらじこそ思ふ

十三、壽命無量願

鶴龜もなごかおよばん量りなきかのくにびこのながき齢に

十四、聲聞無數願

ひこ色の姿なれごもかりにたゞ昔ながらの名をぞよびける

十五、眷屬長壽願

高砂の松をちこせのあるじにて住むひなづるも齢つきせじ

十六、離譏嫌名願

ひこいろの錦なりけり醜草のみだれたる名もなき秋の野は

十七、諸佛稱揚願

世のなかにほめぬ人こそなかりけれ其名に高き三吉野の花

十八、至心信樂願

にごり江のにごれのなかに咲きいでて薫めでたき花蓮かな

十九、臨終來迎願

長き夜の夢もさめゆくあかつきの空にきこゆる糸竹のこゑ

二十、果願

御名をよぶひごこそ遂にかのくにの花の臺に生るこはきけ

二十一、具三十二相願

我もまたうき身すてなば聽てゑむ四つの八つてふ花の相を

二十二、必至補處願

くれ竹のひごよあけなば望月の光くまなく世をてらさまし

二十三、供養諸佛願

時のまに四方の佛の國にいでて手向けむ品も彌陀のたま物

二十四、供具如意願

おもふごこ四方の佛にたむけまし花も衣もまたたきものも

二十五、說一切智願

思ふこと說きつゝのりにたがはぬは佛の智慧を賜りしなり

二十六、那羅延身願

うるはしき相のみかは奈良延のかみにひごしき力さへゑて

二十七、所須嚴淨願

須ゆらむその物みなはこりごりに色も形もうるはしと說く

二十八、道場樹願

たちよりてあふげば高し法をこく調べたへなる御佛の樹は

二十九、得辯才智願

法の道ことばのしなも人のためこかんと思ふ己がまに〳〵

三十、智辯無窮願

說出す法の言の葉ひとつだに及ばぬくまはつゆもあらじな

三十一、國土清淨願

絕て世にうつらぬ影もなかるらむ鏡に塵のけがれなければ

三十二、寶香合成願

高殿も花の木蔭もなべて皆いとかぐはしき香こそにほへれ

三十三、觸光柔輭願

池水にこちし氷のひこしれずこくるも春のめぐみなるらむ

三十四、聞名得忍願

悟るべき身こかねてより定るもきゝるし御名の力なりけり

三十五、女人成佛願

もらさじのふかき惠をしらすこて障ある身を殊に呼びけむ

三十六、常修梵行願

すくはんと思ふこゝろに物の爲こはにゆきかふ四方の國々

三十七、人天致敬願

天津神はたくにつひこなべてみなあふぐは法の力なりけり

三十八、衣服隨念願

おのづからの錦の袖の麗しくおもふまに〳〵身にまこひ筒

三十九、受　樂　無　染　願

たのしみやおもふ心の塵もなし花を見れども鳥をきけども

四十、見　諸　佛　土　願

思ふごと見るか寶の木かげより四方の佛のくにをつくして

四十一、諸　根　具　足　願

ますら雄の姿にいつも生るてふ誓もふかき彌陀のめぐみや

四十二、住　定　供　佛　願

しづかなる心ながらにやがて又よもの佛にもの手むけつゝ

四十三、生　尊　貴　家　願

やごとなき身にのみ世々に生るてふ御名を聞得し縁床しも

四十四、具　足　德　本　願

程ごほき佛の道の花も實も御名をきゝゐし身にみちぬべし

四十五、住　定　見　佛　願

靜なるこゝろの海にうかふなり四方のほとけのその面影も

四十六、隨　意　聞　法　願

法の聲あまねき中にひと色をわきてもきかむ願ふまに〳〵

四十七、得　不　退　轉　願

彌陀の名をきゝゐし人は玉くしげふたゝび迷ふこと無る蘭

四十八、得　三　法　忍　願

御名をきく人はほとけの位山のぼりて高き身となりぬべし

南無阿彌陀佛の六字を、句の頭におきて、宗祖大師